

すぎかえる二六三号「嘘」

GON OUT
BACKSON
BISY
BACKSON
("The House at Pooh Corner")

がいしつ
すぎかえる
いすがし
すぎかえる
（「プー横丁にたった家」）

* * * *

フクロは、もういちど、そのはり紙をながめました。フクロくらい教育のあるものになると、はり紙をよむなどということとは、ぞうさもないことです。

「がいしつ　すぎかえる　いすがし　すぎかえる。」

いかにも、はり紙に書いてありそうなことじゃありませんか。

「万事、明白ではありませぬか、ウサギさん。クリストファー・ロビンは、スギカエルといつしよに外出されたのですよ。最近、あなた、森のどこかでスギカエルをお見かけにはなられなかつたかな？」

「さあ、わからない。」と、ウサギはいいました。「それが知りたくて、きみのところにきたんだ。スギカエルって、どんなもの？」

「さよう。」と、フクロはいいました。「ぶち、または草食性のスギカエルはどんなものかといえ
ば――」

目次 Contents

テーマ小説「嘘」

おしゃべりと静寂.....しらす 9

世界五分前仮説.....呉田仁 29

純子さんのオルゴール.....谷山大哉 33

企画「架空文学賞」

第二六三回杉蛙文学賞発表.....黒田ももん 55

企画「何もない一日エッセイ」

朝にパン.....荷輪治吾郎 67

漠々	荷輪治吾郎	73
空想の秋	はにほ	83
テーマ外作品		
絵本		
きらきら	なこ	91
短歌		
臨界	親嘴鳴	117
詩集		
滅私集	後藤鐵弐	119
あとがき		
編集後記		139

おしゃべりと静寂

しらす

あ、ようちゃん！　よく来たね！　暑かったでしょ？　こんな日に呼び出しちゃってごめんね。ようちゃんもすーちゃんも忙しいからさ、中々予定が合わなかったんだよね。家の中はちゃんとクーラー使って冷えてるみたいだから、入って入って。

いやあ、それにしても久しぶりだなあ。二か月振りくらいとかかな。え、二か月って大した期間じゃないよって？　いやいや、親友と会わない期間としては長いでしょ。それに前に会ったときは、他にもたくさん人が来てて、あんまりゆっくり話せなかったし。もちろん他の人だって大事な人だからそれは仕方ないことだし、ありがたいことなだけ。個別にゆっくり話すことで得られるものってやっぱりあるじゃない？

「桜さんの友人の三井陽です。電話口で何度かやり取りはさせていただきましたが、直接話すのは初めてですね。本日はお招きいただきありがとうございます」

うわ、ようちゃん、流石社会人。ものすごいきっちりした挨拶だねえ。でも、そんなにかしこまらなくて大丈夫だよ。ほら、すーちゃんも緊張しちゃってるから、楽に話してよ。

「ご丁寧にありがとうございます。ああ、でもあたし、年下ですし。敬語を使っていたかなく

て大丈夫ですよ。こちらがお招きしたんですし、もっと楽になさってください」

全部すーちゃんが言ってくれたね。いやはや、人見知りだったすーちゃんがすっかり挨拶できるようにとなるとは……。お姉ちゃん感慨深いよ。

「ありがとうございます、ではお言葉に甘えて。すみれさんも楽に話してしてくれて全然良いからね。……その後、ご両親はどんな風にされてるかな。色々とお忙しいだろうと思って、ご連絡してなかったんだけど。すみれさんも、体調とか大丈夫かな」

ようちゃん、うちの家族のことまで気遣ってくれてありがとうね。まあ、忙しいのはわたしのせいだから、悪いなと思っではいるんだけど。今回ばかりは私は手出しできないからねえ。

「おかげさまで、何とかやっています。母はもっと落ち込んだりかも、って心配してたんですけど、忙しいのがかえって良かったのかな。割と元気です。今日も三井さんによろしくと言って、役所の手続に行ってます。あたしの方も、全然元気で。いつも通り過ぎて、何だか申し訳ないくらいです」

ええ、すーちゃん、そんな風に思わなくていいんだよ。いつも通り元気っていいことなんだか

ら。むしろ健康最高って叫ばないとなんだよ。

「気持ちはずごく分かるけど、申し訳なく思わなくていいと思うよ。桜が、すみれさんが元気なことで怒ることなんて絶対ないよ。桜、すみれさんのことずっと大事にしてたんだから。むしろ元氣ばんざい、みたいな、そんなこと言ってるくらいだと思う」

おお、流石親友！ その通り！ 以心伝心！

「……ありがとうございます。そうですね、こんなこと言ったらお姉ちゃんに怒られちゃう。病氣が見つかるまで、ほんとに元氣な人だったからな……。亡くなった人を心配させるようなこと、言っちゃだめですよね」

そうそう、その調子だよ！ あんまりそういうこと言っていると、化けて出ちゃうんだからね。そろそろ場も温まってきたころかな。じゃあ、本題に入ろうか！

*

「えっと、今日は、おうちに置いておく桜の写真を決める、ってことで良かったかな。私、趣味で写真撮ってるから、桜を写したのも結構たくさんあって、そういうのをなるべく持ってきてみたけど……。ご遺影の写真は、使わないんだね」

そうなんだよねえ、なんか、気に入らないみたいで。結構いい一枚だと思っただけだな。

「はい。あたしたちもそれは考えたんですが……。あの、正直に言ってほしいんですけど、遺影の写真、どう思われました？」

え、な、何？ わたしが終活中に選んだ渾身の一枚なんだけど？

「……ものすごく正直に言くと、証明写真だった。正面・無帽・口角はわずかにあげて、って感じで、遺影というより履歴書の右上に貼ってある方が違和感なかった」

「ですよ。まあ、そういうタイプの人だったなら、あたしたちも故人の遺志を尊重して、って形でそのまま家に置いておいたんですけど。……違うじゃないですか、全然」

どういう意味よ！ 遺影にいえーい！ みたいな写真選ぶわけにいかないでしょ！ あ、違、これはダジャレじゃなくて、その、えーと、まあ聞こえないからいいか！

「そうだね。私、少なくとも桜が生きてる間に、あんなに分かりやすく真面目な顔してるの、ほぼ見たことないし。大笑いしてるとか、何かにびっくりしてるとか、感動して泣いてるとか、そういう派手な感情が出てる顔しか印象にない」

「ええ。あたしたちもそうです。なので、あんなリクルート写真に見つめられるって違和感がすごくて……。遺影の方は、まあ、お葬式の真面目な場だし、っていうのでそのまま使ったんですけど、家に置いておくなら、もっと永井桜っぽいものを、となりまして。でも、うちの家族、写真を撮る習慣がないので、最近の姉の写真があまりなくて……。三井さんがたくさん撮ってくださいって、助かりました」

なんか、わたしに対するみんなの人物評にもものすごく物申したいけど、ちゃんと考えてくれた先の結論ってこと？　だよな？　そういうことにして、故人は黙っておきます。

「いやいや、全然。むしろ、役に立てて嬉しいくらい。……ところで、ごめんね、ちょっとさっきから寒いような感じがするんだよね……。すみれさんが暑くなかったら、少しエアコンの温度を上げてもらえると嬉しいんだけど……」

「あ、勿論です。というか、実はあたしもちよつと寒くつて。すぐ上げますね。おかしいな、適温に設定したのに……」

え、聞こえてないよね？

*

おお、すごい量だねえ。わたし、こんなに撮ってもらってたんだ。これだけあれば、二人の気に入るのもきつとあるんじゃないかな？

「あ、これとかどうかな？ 旅行先で撮ったんだけど、結構写りいいかも」

わあ、それ懐かしい！ 四年くらい前の夏休みに行った旅館の写真だね！ これは、夕飯時かな？ 楽しかったなあ、この時。ようちゃんともう一人の友達と、山あいの観光地に旅行に行ったんだよね。温泉もいいお湯だったし、ご飯も美味しくて、本当いい思い出。

「あはは、お姉ちゃん、楽しそうですね。いい写真だな。……あ、ちよつと待ってください。この

手元……」

え、何なに？ 片方では普通にお箸持つてて、もう片方では……あ。

「……刺身を鷺掴みにしてるね。なぜ」

「見たところ、おそらく理由はこれです。横のおしぼり」

「……あー、手を拭こうとして、ひんやりしたものに手が当たったからおしぼりだと思って握り込んだら、ひんやりした刺身だった、と」

「はい。そしておそらく、みなさんが気づいていないのをいいことに、この後そつと手を外して、正しく手を拭き直したはずですよ。そういうところ見栄っ張りな人だったので」

バレちゃったらしやうがないね、名推理ですよーちゃん。いや、今の今まで忘れてたんだけど。だってだって、流星に恥ずかしいでしょ、おしぼりとお刺身間違えるなんて！ それくらいの見栄張らせてよ！

「……うん、これは、見送ろうか」

「そうですね……。見るたび大笑いしちゃいそう。あ、でも、この写真もいただけますか。親に

見せます」

「いいよ」

え、ちよつとやめて！

*

まさか、かつて隠ぺいした恥が掘り返されるとは……。いいよう、次行こ、次。

「えつと……これは、多分試験勉強の時に撮ったんだな。天気が良かったから外で勉強してて、ちよつと秋だったから銀杏が綺麗で」

「あ、お姉ちゃんと三井さんの学部、試験が多かったですもんね。へえ、こんな感じで勉強してたんだ。お姉ちゃん、勉強は大体いつも自分の部屋でやってたんですよ。こんなにしっかり学習風景を見るなんて、小学生以来かも」

「桜、すぐく成績よかったよ。普段ふわふわしてるのに、レポートの文面なんかはものすごくか

つちりしてて、ギャップだったなあ」

えへへ、それほどでも。まあ、勉強は嫌いじゃなかったから。でもねえ……。

「うーん……。すごくいい写真なんですけど、これも、見送ってもいいですか」

「あ、うん、それは全然。……だよ。桜、試験とか評価される系のものをやるとき、毎回しんどそうだったもんね」

「はい。毎回、試験期間は、ちょっと元気なかったです。いつも通り笑ってはいるんだけど、何だか無理してる感じで。多分このときもそうだから、そんな写真を飾っちゃうのは、お姉ちゃんに悪い気がする」

あらら、分かったの？

そうなんだよね、勉強するのはいいんだけど、評価されるって思うと、こう、胃のあたりが痛くなってくるというか。勉強だけに集中できなくなっちゃって、結構きつかったな。それでも頑張って、進路に必要な成績は維持してたつもりだけど。学んだことを活かし切る前に死んじゃったから、ひよつとしたら無駄に胃を痛めたんじゃないかっていうのは、まあ、たらればだよ。

いやはや、心配かけたくなくて隠してたつもりだったのに、ばれちゃってたか。二人ともわたしのことよく分かっているなあ、すごいね！

「まあ、つまり、少々格好つけてことですね。真面目なのもプレッシャーに思っているのもバレバレなんだから、素直にしんどいって言えばいいのに。寝不足みたいだけど大丈夫、なんて訊いても、必ず『平気平気』とか言うんですよね。」

「あれで弱みを見せるの、嫌がるタイプだったよね。みんなテストなんて嫌いなんだから、恥ずかしがることないのに。格好つけていうのは、納得しちゃうなあ」

人物像を知られすぎっていうのも考えものだね？ 容赦がないよ。もうちょっとこう、オブラートに……包まないのが、二人のいいところだね。仕方ないなあ。

*

さて、お次は？ おお、これは。

「うわ、大きい雪だるま。作ったんですか、これ」

「そうそう。桜がね」

ふふん。すごいでしょう。

「え、お姉ちゃん一人ですか」

「そうなの。というか、何でそうなったのか覚えてないんだけど、構内の空き地使って、そのときいた面子でそれぞれ一つずつ作ってたのね。あとで見せ合いしようねって。珍しく市内にもかなり積もった日だったから、テンションが上がってたんだと思うんだけど。で、作り終わってみたら、桜の作ったのだけこんなに大きくてさ。みんな精々足元サイズのしか作らなかったのに、もう、びっくりだよ。あとサイズだけじゃなくて、顔の配置とかも完璧な出来じゃない？ その辺も褒め称えたよ。私に限らず、みんな写真撮りまくって、桜もご機嫌」

「わあ、ほんとだ、得意満面」

だってね、みんながすごいすごいって写真撮ってくれるんだもの。ここで調子に乗らないでいつ乗るのって感じでしょ？ 実際、会心の出来だったし！

「桜、こういうの、絶対手抜かなかったよね」

「はい。家族内のゲームとかも、いつも全力でしたよ。何回喧嘩したか」

あら、また雲行きが怪しいような。

「私怨ですが、これはなしで。大昔、オセロで泣かされた記憶がよみがえってきました」

「あはは、残念」

う、だって、オセロで角が空いてたら取るでしょ、普通。まあ、幼稚園生の妹にそれをやって、全面黒にしたのは、ちょっと大人気なかったけど。

「あと、実は、すごくいいの、見つけてしまって。飾るのはそっちにしたいから、この写真はなしです」

あ、よかった、恨みだけで雪だるま写真が外されたわけじゃないんだ。高だか一回のオセロで、十何年残る恨みを与えてたんだったら、さすがに申し訳ないもんね。それで、すーちゃんセレクトはどれかな？

「あ、もしかして、これ？」

「それです、それです」

わあ、これって……。

「うん、私も実は第一候補にした」

「すごくいい写真ですね、一目でぴんと来たんです」

うんうん！ わたしも同感だよ！ この写真、大好き。

ようちゃん、いっぱい撮ってくれて、ありがとうございます。すーちゃんも、一生懸命選んでくれてありがとうございます。嬉しいなあ。

その写真、わたしの代わりに大事に飾ってね。よろしくだよ！

すみれさんが、丁寧な手つきで写真をケースに入れる。

しゅる、かぱっ、ことん、と音がして、一輪挿しの飾られたテーブルに、先ほど選んだ写真が

置かれた。

「はい、いかがでしょうか、お姉ちゃん」

「背後でグッジョブ！　ってしてると思う、多分」

「あたしもそんな気がします」

桜の面影のある目をにこっと細めたすみれさんは、ふと真面目な顔に戻って、ぺこりと私に頭を下げた。

「三井さん、今日は、本当にありがとうございました。写真を持ってきてくださったことも勿論ですけど……お姉ちゃんが言いそうなことをいちゃいいながら選ぶ、なんて提案に乗ってください」

「ううん、全然。むしろ、こんなことさせてもらって、すごく嬉しかった。……桜が、まだ一緒にいてくれているような気分になったよ」

何度目かの電話上のやり取りでのこと。亡くなった友人の妹との初対面に思いを馳せ、少し緊張する私に、すみれさんは、こんなことを言ってきた。

『あの、明日、写真を選ぶときなんですけど……。姉の言いそうなことを、思いつく限り言い合いながら選びませんか。あの姉のことだから、多分、自分の飾られる写真を選ぶときなんかには、黙って見ているはずがないと思うんです。その写真にはこういう思い入れがある、とか、すーちゃんその思い出は自分の認識とはズレてる、とか、色々口を挟みまくりながら選ばせると思う……。できるだけ、それをなぞってみたいんです』

姉に似た声で、無理にお願いはできないんですけど、というすみれさんに、私は、一も二もなく頷いていた。

もしかすると、私は、桜がいなくなってから、ずっとそういうことがやりたかったのかもしれない。なかった。彼女のにぎやかな声が消えた生活は、あまりに静かで、ぽかんと空白が空いたようだった。せめて、桜の言いそうな言葉を、桜の言いそうな口調で連ねて、その穴を埋めたふりをしたかった。

「……ふふ、すみれさんの言った、『かつて隠ぺいした恥が掘り返されるとは』って台詞、笑っちゃった。本当に言いそう。というか、言ってる」

「三井さんの考えるお姉ちゃんの台詞も、全部それっぽかったですよ。特に、何か指摘されるとすぐむきになって言い返そうとするところとか、そのまんま。怒ってるつもりなのかもしれないけど、全然怖くないんですよねえ」

お互いに、笑い合う。

そうして一息つくと、また静寂が戻ってきた。

すみれさんも私も、それほど多弁な方ではない。桜と私が話すときは、大体桜の口数の方が圧倒的に多かったし、今日会って見た感触として、おそらく桜とすみれさんが話すときもそうだったのだろう。

本当は、分かっている。

いくら「永井桜の言いそうなこと」を連ねても、それは「言いそうなこと」に過ぎず、嘘でしかないということを。

本物の永井桜は、もしかすると、私たちがちょっとした失敗をからかったことを、本気で怒るかもしれない。辛めの人物評を仕方ないとは笑ってくれず、随分落ち込むのかもしれない。雪だ

るまを作るのなんて本当は面倒くさくてやりたくなかったと、数年越しに告白するのかもしれない。

彼女のいないことでできた静けさを、本当に埋めることができる存在は、永井桜しかない。そうでなくてはいけない。

でも、それはもうかなわないのだ。

「……いい写真ですね、本当に」

すみれさんが言った。桜よりすこし高く、涼しい印象の声。

写真の中の桜は、咲き誇る大きな桜の樹の前で、半身を振り返り、満面の笑みを浮かべていた。撮ったのは、病気の見つかったすぐ後。桜に誘われて一緒に行った、花見の最中の写真だった。

彼女の名前を冠したこの花のことが、彼女は好きだった。

写真をじっと見つめながら、すみれさんが言った。

「会いたいな」

今度は、誰に聞かせるでもない、ぼつりとした独り言だった。聞かせるべき相手がもういない

から、そうなってしまった。

あくまで涼しいすみれさんの言葉の余韻を、じつくりと噛み締める。
十分に沈黙を味わい尽くして、すみれさんが、私の方に向き直った。

「ねえ、陽さん」

「うん」

「よければ、また、一緒にやってくださいませんか。お姉ちゃんがこの場にいたら、っていう、
もしもの話。時々、寂しくなった時に」

「……うん。私も、そうしたいな。お願いね」

よかった、と笑う顔は、本当に桜によく似ていた。

「お菓子、用意してあるんですよ。お姉ちゃんも好きだったお店の。よかったら、一緒に食べましょう」

そう言ってくれるすみれさんに応じながら、私は、改めて写真の中の桜に向き合った。
にぎやかで、すこし抜けていて、見栄っ張りで、真面目で、何事にも一生懸命だった、自慢の

友達。あなたがいなくなつて、私たちの世界には、随分静かな穴が開いてしまった。それは、決して埋まることはないけれど。そこに少し、嘘を映してみくらいいなら、許してくれるよね。

話しかけてみても、相変わらず、帰ってくるのは静寂ばかりだ。

それでも、嘘つきな私の眼には、写真の中の桜が、先ほどよりもっと朗らかに笑っているように見えた。

世界五分前仮説

呉田仁

ここは恐らく駅に併設された様な商業施設のレストラン街だと思ふ。経済の成長期にポコポコと建てられた施設（というのとは適当な印象だが）といった趣で、風情あるうどんそば屋や喫茶店杯が並んでいた。私がそこを訪れた時間帯は生憎、閉店の頃合いで、うどん屋なんかは暖簾を下す作業の途中だった。それでもガラス越しに並ぶ食品サンプルを眺めるのも案外楽しいもので、私はプラプラと見て回るのだった。

暫くして、ふと私はある洋食屋の前で立ち止まった。ガラスケースに、とんかつ定食やカレー、オムライスが並んでいる。私は幼児と接する時かの如く小さく屈んで、オムライスを凝と視た。忽ちにして、その紛い物にすら心奪われたのである。

我を忘れて其れと睨め競をしていると右側から声を掛けられた。

「アンタ、昨日も来てくれとったね」

途端に私は思い出した。「ああ、そうだ。昨日もここでオムライスを眺めたのだった。」さつきまでは無かった筈の記憶が次々に甦ってくる。「そうだ、昨日も夢で訪れたのだ」何で忘れていたのだろう。

「アンタ、折角せつかくだから食たべて御行おゆき。もう閉めちやったけど特別とくべつだよ」

この店の店主みせのてんしゆと思おもひき割烹着かつぼうぎの老婆ろうばに誘いざなわれるがままに、私わたしは店に入はいっていった。中には小ちいさな卓袱台ちゃぶだいが一つだけ置おかれていた。

「すぐに用意よういするから」と云いつて老婆ろうばは店の奥おくに姿すがたを消けした。そして皿さらを持もつて本当ほんとうに直すぐに歸かえつて來た。皿さらが私わたしの前の卓袱台ちゃぶだいに置おかれる。それは紛まぎれもないオムライスであつた。薄うすい

玉子たまごに赤あかいケチャップの昔むかしながらのオムライス。その周りには飾かざりの様ように鮮あざやかな色いろをしたトマトとキュウリが並ならべられてゐる。親切しんせつな老婆ろうばは御食おたべと微笑ほほえんでゐる。私わたしは良心りょうしんの呵責かしやくに堪たえかねて、そこから逃のがれる様ように強引ごういんに目めを覚さました。はてな。どうしてこんなに焦あせつて起おきたの

だろう。
その晩ばん、夢ゆめを見た。目の前まえのガラスケースには、とんかつ定食ていしょくやカレー、オムライスが並ならんでゐる。

純子さんのオルゴール

谷山大哉

青く澄んだ空の半分くらいを、白く大きな入道雲がどんと陣取っている。

両手を組んだ仙人がこちらを見下ろしているかのような形をしている。

額に浮き上がった汗をハンカチで拭いながら、荒木恵子は仙人雲を睨んだ。

どこかで蝉がミーンミーンと鳴いていて、近いのか遠いのか距離感の掴めない鳴き声が喧しい。

汗で肌にびったり張り付いたシャツが気持ち悪くて、シャツの裾をパタパタ揺すって風を送り込む。

見慣れた石塀の上から金木犀やら椿やらの枝が這い出るように伸びている。

石塀を抜けた左側には、木造の家が寂しく息をひそめている。

庭には名前も知らぬ雑草たちが茂り、家の東側にある裏山には竹が群れをなして隊列を組んでいる。この高い位置にある竹林のために、この家には朝陽が一足遅れてやってくる。

この家の周囲には緑が一面に広がっているから、自然豊かといえば聞こえは良いが実際の所は手入れが行き届いていないだけだ。

私が初めてこの家に訪問介護士としてやって来た時には、純子さんの足腰も今ほどには弱って
いなかった。

純子さんは庭の雑草抜きやら、植え込みの金木犀や椿などの剪定を一人でやっていたし、庭には
色とりどりの花々が咲いていた。

私が庭仕事を手伝うといっても純子さんは断って一人で庭仕事をしていた。

自分の庭ではないのだけれど、私はこの家の庭がお気に入りだった。

それが今では見る影もなく、玄関まで続く踏み石は雑草に隠れているからどこを歩いても同じだ。
私は玄関にちょこんと佇むアビーに目でおはようと挨拶してジーンズにくっついた引っ付き虫
を取り除いた。アビーは犬の置物で、純子さんがアビーと呼んでいたから私もそう呼ぶことにし
ている。スピッツかコーギーのどっちかだと思う。犬種は詳しく分からないが、とにかく弱いく
せによく吠える犬だ。もちろんアビーは陶器でできたワンちゃんだから吠えたりしない。薄緑が
かったベージュの毛並みに、ビー玉みたく澄んだつぶらな瞳とハムみたいに垂れた舌が可愛らし
い。

ガラガラと引き戸を開けて今度は声に出しておはようございますと挨拶をする。もちろんいつも通り返事は無い。

土間の隅っこの方に純子さんの小さな靴が一足だけきちんと並べられている。

私は上がり框に腰掛けて靴を脱ぎ、静かに居間に向かった。

玉暖簾をじゃらじゃら鳴らさないように気を付けてくぐると、純子さんが介護ベッドの上で体を起こして中空をぼんやり眺めている。

もう一度おはようございますと挨拶するが無反応。

純子さんは自分だけの世界に没入しているようで、こちら側から声をかけてもまるで届いていない。

招りガラスで砕け散った陽光は曖昧な形をしていて、純子さんの瞳に届くころには水の中に牛乳を垂らしたみたいに濁っている。

茫洋とした純子さんの瞳に現実世界での希望とか一筋の光とか、そういうふうな生きる励み的な何かしらが萌すことはもしかしたら無いのかもしれないと考えてしまう自分自身を介護士として、

というよりはむしろ人間として軽蔑してしまう。

純子さんは認知症が進行しており、一日のうちのほとんどの時間を介護ベッドの上で過ごし、過去の記憶の中を彷徨っている。

足腰は弱っているが、それでもお腹がすいたら私が作り置いた煮物やお粥などを自分で食べ、トイレがしたくなったらとぼとぼトイレまで歩いて一人で用を足す。

認知症がこれ以上進行し、今よりもっと足腰が弱ってしまったら純子さんはどうなってしまうのだろうか。それも時間の問題だろう。

純子さんはお腹のあたりに置いたオルゴールを優しく撫でている。

三十二弁の箱型オルゴール。外側は赤い革製で、かつては鮮やかなワインレッドだったであろうオルゴールは長い時間を経て、まだらに色褪せている。

ショパンのノクターン。夜想曲というらしい。純子さんが教えてくれた。

何度も何度も同じメロディが繰り返される。

本当は軽やかで包み込むような優しいメロディのために人は感動するのだろうか、この部屋

の中でのそれは歪んでいて、私は憂鬱になる。

この気持ちをアンニユイと言うのだそう。最近、本を読んでいて知った言葉。

純子さんはきつと、このオルゴールの奏でる限定的なメロディと同じように、人生のうちのほんの一部分を切り取った記憶を再生し続けているのだろう。

*

私が初めて純子さんの家を訪れたとき、純子さんは庭仕事をしていた。

私が勤めるケアセンターの所長から、純子さんは八十七歳の高齢女性で独り暮らしと聞かされていた。だからベッドの上で寝たきりだとか、一人で歩くのもままならないとかそういった状態を想像していたが、純子さんはしゃがんでせつせと手を動かしていた。

「今日から担当させていただく荒木恵子です。よろしくお願いします。」私は頭を下げて丁寧にお

辞儀をしたのだが、純子さんはちらりと私を一瞥しただけで何も言わなかった。

「何かお手伝いしましょうか？」私が声を掛けても純子さんは黙々と雑草を抜いたり、花の手入れをしていた。

私は肩にかけていたシオルダーバッグを置き、腰をかがめて雑草を抜き始めた。

「触らないでくれ」純子さんは顔の皺を少し深くして静かに言った。

私はむっとして言い返そうとしたが、言葉を飲み込んでもう一度何かお手伝いしようかと尋ねた。

「便所掃除」純子さんはこちらに目もくれずそれだけ言って黙々と庭仕事を再開した。

なんだか腹立たしく感じたが、こちらとしては仕事なので仕方なく荷物を持って家に入り、トイレを探した。

玄関を上がつてすぐ右側に玉暖簾が掛かっており、前方は二階へと続く階段、左側には和室があった。

私は直観で右側を選んだ。玉暖簾をくぐると居間になっており、その先にはアコーディオンカー

テンが開かれていて台所へと続いていた。

居間にはドアが一つあって、そこを開くとすぐに洋式トイレの個室が二つ並んでいた。

純子さんは独り暮らしだと聞いていたので、純子さん一人にふさわしくなくらい大きな家とか洋式トイレが二つもあることとか、なんだか少し虚しいなと思った。

私がトイレ掃除をしていると、純子さんが様子を見にやってきた。

特に掃除のやり方がなっていないとか小言を言われることは無かったが、去り際に「それが終わったら風呂掃除」そうポツリと呟いて庭仕事へ戻っていった。

風呂を掃除しているときもふいにやってきて新しい指示を出された。

結局私はトイレ掃除、風呂掃除、床掃除、買い出しと雑用係か召使のようにこき使われた。

「今日はそろそろ失礼します」庭仕事中の純子さんに声を掛けて帰ろうとすると、ちよつとお待ちなさいと引き留めて私を和室に案内した。

私が戸惑いながらも和室の座布団に腰を下ろすのを確認して、純子さんは何も言わずにどこかへ消えてしまった。

しばらく待っても純子さんは戻らず、退屈した私は和室のあちこちへ視線を巡らせた。

隅の方には掛け軸が掛かっており、丁度その下で魚を咥えた熊の彫刻が埃を被っている。

そして、そのすぐ隣には小さな仏壇が置かれており、飾られた写真の中の男性がはにかんでいる。まだ四十代くらいに見えた。純子さんの旦那さんだろうか。仏壇の横には骨壺が二つ置かれていて不思議に思ったが立ち入らない方が良くと考えて、気にしない事にした。

和室は障子戸と襖で区切られていて、西日を透かした和紙のために障子戸は橙色に染まっていた。障子戸を開くと縁側になっていて、庭の花々や裏山の竹林が夕風にそよいでいるのが見渡せた。ほんのり温かく感じられる西日に眠気が誘われて、私は縁側で眠ってしまった。微かな畳の優しい香りがとても心地良かった。

ふと目を覚ますと、お味噌汁のいい匂いがした。

純子さんは座布団に座り、お茶をすすっていた。

「すみません、気持ちが良いって眠ってしまいました」

「構わないよ。夕飯を作ったから食べていきなさい」純子さんは素っ気なく言った。

ちゃぶ台には白米とお味噌汁とお漬物が並べられていて、断るのも気が引けたのでありがたいですとお礼を言ってお味噌汁さんに向かい合って座った。

とても質素な感じがしたけれど、どこか心温まるような気がする。なめこのお味噌汁がとても美味しかった。

これがおばあちゃんの味というやつか、と言い表せない感動のために思わず目頭が熱くなった。

「あの庭はね、私の庭じゃないんだよ」

私が夕飯を食べているとき、純子さんはポツリポツリと話を始めた。

「あの庭はあの人が大切にしていた庭でね」純子さんは写真の中ではにかむ男性を物悲しい瞳で見つめる。

まったくおかしいよねえ、男のくせに花なんか愛でてさあ。私の事なんて二の次で、いつも庭のことを考えてたよ。あの人は料理も仕事も服装もみんな無頓着でこだわりの無い人だった。それでもあの庭だけは気違ひみたいにくだわってね、私の事なんてほったらかしで庭仕事ばかり

だからある日言ってやったのよ。『私とあの庭のどっちが大事なの』って。そしたらあの人迷わずに庭だつて答えたの。私もう頭に血が昇っちゃって泣いてたのか叫んだのか分からないけど、とにかくその日は大喧嘩よ。あの人は出て行った。喧嘩するといつもそうなのよ。喧嘩になると私が泣き叫んで、あの人が怒鳴る。それでも私が喚き続けるから、どうしようもなくなつて出ていくの。そして私が布団にくるまって一人ですすり泣いていると、あの人はぐでんぐでんに酔つて帰ってくるの。お酒なんてまるで飲めないくせにね。玄関で『おい純子起きてるかあー』って大声出すんだけど私は無視して寝た振りをするの。そしたらあの人はふらふら壁とかにぶつかりながら私の隣にやってきて『さっきはすまんかった』って謝るんだけど、私は無視してやるの。それでもあの人は子供みたいに謝り続けるから私はたちまち可笑しくなっちゃってね、なんだか怒ってるのが馬鹿馬鹿しくなつてきて二人でクスクス笑いながら抱き合うの。夫婦喧嘩なんて抱き合うための口実みたいなものだった。

でもその日は帰ってこなかった。私は布団の中で一晚中あの人の帰りを、あの人に抱かれるのを待っていた。けれど、夜が明けてもあの人は帰ってこなかった。私も泣き疲れて知らない間に眠

ってしまっていたみたいで、昼頃に扉をどんどん叩く音で目を覚ました。なんだか嫌な予感がして、肌着のまま急いで玄関まで駆けて行ったわ。玄関を開けるとお巡りさんが二人立っていて、私もうそこで崩れてしまつて。おまわりさんは、私が動転しているのも気にも留めないっていうふうに淡々と告げた。旦那さんが水死体となつて海に浮かんでいるのが発見されましたってね。それ以来あの人はずっと帰つてこないまま。本当はね、あんな庭なんて憎らしくって仕方がないんだけどね、あの人が大切にしていた物だからね。あの人が帰らなくなつて、誰も手入れする人が居なくなつたから仕方なく私がやっているだけなのよ。

純子さんの目には小さな涙の粒が浮かんでいた。
きつと純子さんは誰かに話を聞いて欲しかったのだろう。

私はストーブの前で身をかがめて指先を温めていた。

純子さんの家のエアコンはポコポコ音を立てるだけで温かい空気は吐き出してくれないようだ。あと一週間もすれば今年も終わり、新たな年を迎える。私が冬期休暇に入る前に大掃除をするこ
とになり、純子さんの指示に従ってあちこち掃除していたのだがすっかり指先がかじかんでしま
った。

「こらこら、休んでないで掃除掃除。日が暮れちゃうわよ」

「はい」私は両手を擦りながら立ち上がった。

私が純子さんの家に来てすぐの頃に比べると、私と純子さんの距離感はかなり近づいたと思う。
純子さんは、時々だけれど編み物や料理を教えてくれた。マフラーやセーターの編み方だったり、
簡単な料理とか、時には手の込んだ煮込み料理（特にロールキャベツが私の一番のお気に入りだ）
の作り方を丁寧に教えてくれた。

もしも私におばあちゃんがいたら純子さんのように様々な生活の知恵を教えてくれたのだろうか。

私にはおばあちゃんがない。正確にはおばあちゃんという存在の実態が分からないのだ。

私のおばあちゃん（母方の祖母）は私が産まれた八日後に亡くなった。

臍臓がんだと母から聞いたことがある。

医者が宣告した余命通りだったら、おばあちゃんは私が生まれる一か月も前に亡くなるはずだった。しかしおばあちゃんは、もうすぐ産まれてくる孫の顔を一目見ようと、ほとんど根性と意志の強さだけで耐え抜いたそうだ。

私がまだ物心つく前に両親は離婚し、私はシングルマザーの家庭に育った。

だから父方のおばあちゃんも記憶には無く、おばあちゃんという存在がどういうものなのか分からないのだ。

子供の頃にテレビドラマや絵本でおばあちゃんと孫の仲睦まじく微笑ましいストーリーを見たり読んだりしたけれど、ストーリーの中のおばあちゃんの振る舞いとか孫との関係性とかが本当なのかどうか分からなかった。

おばあちゃんというのは孫のために手袋やセーターを編んだり、洋服やおもちゃを買い与えたり、

孫が両親に叱られて泣いているときに優しく抱擁したりするものらしいと、自分とは無関係のまさに物語の中だけの存在だと思っていた。

おじいちゃんはいたけれど、おじいちゃんが母に対して厳しすぎる教育をしていたようで、母は私とおじいちゃんを滅多に会わせようとしなかった。

そのおじいちゃんですえも私が小学生の低学年の時に亡くなった。

当時おじいちゃんが一人で暮らしていた団地のベランダ（四階）から酒に酔って飛び降りたそう
だ。

私はおじいちゃんのお葬式で初めて死んだ人の顔を見たのが印象的で当時の大人たちが話していたこととかお葬式の光景とかが強く頭の中に焼き付いている。

母は両親を亡くし女手一つで私を育てなければならず、金銭面で頼れる相手がいなかったから昼も夜も仕事で、休む暇もない母と一緒にどこかへ出かけることは少なかった。

だから私は夏休みが大嫌いだった。

宿題で出される絵日記は、どのページをめくってもアパートの近くの公園の砂場の風景だったり

滑り台の風景だったり、アパートの一室から眺めた窓外の風景だったりした。

帰る田舎もないから、よくあるような祖父母のもとに一人預けられて田舎の縁側でうたた寝したり小川で魚を捕ったり自然の中を探検したり星空を眺めたりといったありがちな一夏の素敵な体験というものは私には無いのだ。

私はおばあちゃんという存在に憧れを抱いているのだろうか。もしも純子さんが私のおばあちゃんだったらとても素敵だ。やんだったら、と考えることが時々ある。純子さんが私のおばあちゃんだったらとても素敵だ。庭仕事とかお料理とか二人であれこれお喋りしながら笑い合ったり、介護士としてではなく孫として純子さんのお手伝いが出来たら良いのになと。

居間の床やら家具やらを雑巾で拭きながらぼんやり考えた。

身をかがめて介護ベッドの下を拭いていると手に何かがぶつかる感触がして、手を伸ばしてその何かを掴み取った。

埃を被った箱だった。

外側が赤い革製で、箱の上面には金色のアルファベットが並んでいる。指輪とかネックレスなどのジュエリーボックスみたいだった。

「勝手に触るんじゃない!!」後ろから突然純子さんに怒鳴られ、うひゃつと間拔けな声をだしてその箱を落としてしまった。

落下の衝撃でピロンと小さな音を出して箱の蓋が開いた。オルゴールだった。藍色のビロードの上に古めかしい機械仕掛けが納まっていた。上蓋の内側にはまだ幼い少女の写真が貼られていた。白黒の少女が口元を三日月の形にして笑っているのが見えた。

純子さんは慌てて駆け寄ってきて私からオルゴールを庇うようにして両手で隠した。「もう帰っておくれ」純子さんは私を睨み上げて静かに言った。

純子さんに異変があったのは、年が明けてから初めて純子さんの家を訪れた時だ。

純子さんは介護ベッドの上で正座をし、視点の定まらないぼんやりした目をして空間を眺めていた。

「おはようございます」私が声を掛けると、日なたで甲羅を乾かす亀のようにゆっくり首を回してしばらく黙ったまま私を眺めてから、目をぱちくりさせて「どちら様で」と言った。

さっきまで手を繋いでいた人に崖から突き落とされたかのような気持ちだった。

悲しくて、やりきれなくて、気づかぬうちに涙がこぼれていた。

どうしてこんなに悲しいのだろう。私と純子さんは他人のはずなのに、とっても悲しくてやるせなくなかった。

「どうされましたか、大丈夫ですか」純子さんは首を少し傾けて心配そうな目で私を見つめている。

「大丈夫です」私は涙を拭いながら答えた。

純子さんは少し微笑んで、膝の上に置かれたオルゴールを撫で始めた。

「大切なオルゴールなのですか？」そう尋ねると純子さんはふふつと微笑んで、オルゴールを優

しく撫でながら話した。

「このオルゴールはね、優子がプレゼントしてくれたの。」

純子さんはオルゴールの蓋を開けて写真の少女を見つめる。

「名前の通りとても優しい子なのよ。私が寝込んでいるときに優子が心配そうにするから『お母さん熱っ気があるわ』って言うと同じ布団に入ってきてね『じゃあ優子が背中トントンしたげる』って。このオルゴールのゼンマイを小さな手で巻いて、背中を優しくたたいてくれるの。私が喜ぶとね、優子は毎晩のように私の隣にやってきて背中をとんとんしてくれるのよ。でもオルゴールが子守歌みたいだから心地よくなって、いつも優子が先に眠っちゃうんだよね。きつともうすぐ学校から帰ってくる頃よ」純子さんはそう言って、またオルゴールに視線を落とした。

それから日が経つごとに純子さんの認知症は悪化していった。

私を泥棒呼ばわりして騒いだり、私に殺されると思って大声で助けを求めたり、私をかつての級友と間違えて思い出話をしたり。

そしてふと正氣に戻ると、今度はめつきり何も喋らなくなる。

私が純子さんと同じ部屋にいても、純子さんは無反応。こちらからいくら働きかけても、それは純子さんに届かない。

一番近くにいるはずなのに、私のことが誰なのかまるで分からなくなってしまったのだ。

*

ノクターンの音色が中途半端なところで途切れて、私は白昼夢から現実に取り戻された。

純子さんのほうも現実に引き戻されたようで、一瞬恨めしそうな表情になり顔の皺が深くなったが、すぐに無表情になってこちらにゆっくり視線を向けた。

「あら、優子。お帰りなさい」

純子さんは私を娘の優子さんと勘違いしているのだろう。

「ただいまお母さん」ふいに嘘の台詞が零れた。意図した言葉ではなかった。

そして無意識に体が動いた。

かつての少女がそうしたように、私は純子さんに歩み寄りオルゴールのゼンマイを回す。

ノクターンの歪んだ音色がチロチロ流れ始め、甘ったるくて胸やけがしそうなメロディが部屋に充滿してゆく。

純子さんは中毒者みたいに瞳を溶かして中空を眺めている。

私はだんだん吐き気がしてきて、庭の雑草を全部燃やしてしまいたい気持ち、オルゴールをぶち壊してしまいたい気持ちを必死に隠しながら純子さんの肩をトントンたたいてやった。

夜中に酔って帰ってきて彼女を抱く男も、彼女にオルゴールを聞かせてくれる娘も二度と帰って来ない。それでもノクターンのメロディは途切れながらも続いてゆくから、純子さんは戻らぬ夜を彷徨い続けるしかないのだろう。

オルゴールが鳴り止むまでに玄関先のアビーにさよならを言って帰ってしまおうと思った。

第二六三回杉蛙文学賞発表

黒田ももん

第263回 杉蛙文学賞発表

受賞作 記念品及び副賞百万円

六甲山帰り

信田異星

「新調」九月号

童 文男

図書館二郎

明 太子

鮭山 腹美

美田民苦戸

月見場亜我

第二六三回の受賞が右のように決定しました。この賞は、故杉蛙度部蔵氏の業績を記念するとともに、文芸のさらなる振興のため設立されました。審査の対象は短篇・中編小説とし、その年度における最も完成度の高い作品に授賞します。各方面の皆様のご協力に感謝するとともに、今後のご支援をお願いいたします。

公益財団法人 杉蛙文学会

〈選考経過〉

童文男・図書館二郎・明太子・鮭山腹美・美田民吉戸・月見場亜我の六委員が出席して討議を行い、右の通り受賞を決定いたしました。

受賞作以外の候補作は次の四作品です。

瓜帽太郎「猪狩り」(「文鯨」夏季号)

田中M権三郎「バナナ農園」(「昴」十月号)

樺野眠子「センチメンタル・レイン」(「軍蔵」五月号)

白田ももむ「漂白」(「文学貝」二月号)

これらは、昨年度の各雑誌ならびに単行本に発表された短編・中編小説の中から予選を通過したものです。

【受賞の言葉】

信田 異星

ご連絡をいただいたときは、まさか、という
思いで、お電話の後、十分ほど固まっております。
当の私ですらそんな有様ですから、家族
や知人には、詐欺じゃないかと言われたもので
す。自分の文学の道に迷い続けて十年、未だこ
の霧は晴れません。この度の受賞で一つの光
明を掴んだという気がします。本当に身に余る
光栄です。先人たちや評価してくださった皆様
に敬愛の念を表するとともに、これからも精進
して参ります。

選評

「選評」

童 文男

受賞作の「六甲山帰り」は、私は純粋に推せなかった。洗練された文章で破綻もなく、むしろ読みやすいまでもあるのだが、男女の頭上を淡々と言葉だけが上滑りしていく感じが否めない。死と隣り合わせの登山を終えて帰路につく男と、病魔に見舞われ、入院前最後の外出を駅で過ごして

いる女、これら二人の生死の交錯が曖昧にしか像を結ばないのは、登場人物の人生の端々を「匂わせる」ことに終始しており、垣間見られた断片が結局は一つの絵画として結実していないからである。

読後に残るのは寂寥ではなく深い虚であり、投票で手を挙げることはできなかった。

「バナナ農園」は、青年らの言語化が困難な感傷を真正面から扱った作品で、好感を

もった。病身の妹のため労働に励む若い農夫と、人生に影を抱えた女子学生たちの日々は心を打つものがある。さらりとした文章もよい意味で軽みがある。ただ、受賞作となるともう一歩足りない、と感じた。

「センチメンタル・レイン」は、読後の印象に突き抜けた爽やかさを感じた。三十路近い女の自意識の一瞬だけのほのかな揺れを見事にとらえて

いる。この作には社会や世相といったものはない。思想ではなく抒情を小説に昇華させた散文詩のような作で、私はそこに作者の才を感じた。男女の陰影が色濃く描かれていて、ともすれば陳腐になりがちな主題を、雨に濡れた女の香りが際立たせている。いたく感心したのだが、意外に票が集まらなかった。

瓜氏の「猪狩り」は堅実な作品である。夢中での猪との

対峙は、自己存在の危機を我々に喚起させる。ただ、堅実なあまり、展開が通俗的で逸脱がないのが悔やまれる。氏のエネルギーと情熱の奔流が、あと数歩のところまでせき止められている。作者の才筆は疑うべくもないが、まだ若いということもあって、もう一作を待ちたいとの思いが拭えなかった。

ところで昨今、受賞作の大量性に関する議論をよく目に

するようになった。選考委員としては呆れるばかりである。小説とは最低限読者に訴えかけるものがなくてはならない。それが娯楽性であるかどうかは、個々の作品で異なるだろう。十把一からげに「大衆性」と論じられるものではないと私には思えてならない。

空白の色彩

図書 館二郎

今回、「六甲山帰り」を一番

に推した。六甲山からの帰路につく男が出会った女は、まったく生命力が欠如しているが、それがむしろプリズムの光のように澄み渡っていて好ましかった。そして、色あせた男女を背景に、空白の六甲山が生々しい色彩を帯びて立ち上がってくる。日常と非日常の交錯や、レンズの虚像を思わせる奥行き。ステンドグラスのような第一級の作品だと思った。

田中氏の「バナナ農園」は渾身の作品だが、少々力がこもり過ぎていて。女子学生たちの姿は瑞々しい感性で紡がれているが、肝心の農夫の印象が何一つ残らない。題材は良いだけに、失われた青春への思慕というテーマの平凡さが際立っている。

筋立ての平凡さは、樺野氏の「センチメンタル・レイン」もそうだ。肉体と抒情の付け合わせに新鮮味がない。通り

雨と内面とが混濁していく女は現実の側に存在するが、相手の男は虚構の域を脱していない。本作は女よりもむしろ男を書くべきだと思う。

今回は全体的に若さを感じる作品が集まった。その割には古典的な作が多く、感受性に富んでいるであろう若き作家たちが、こうした小説を執筆せねばならない意味について、改めて考えさせられた。

正直な感想

明 太子

今回は特に推したい作品を決めずに先行に臨んだ。議論を重ねていく中で、「六甲山帰り」が一種の不思議な浮遊感とともに浮上した。六甲山から帰路につく登山客の男は、ふもとから数駅離れた神戸の地で、難病の女と出会う。山を離れ、海へと向かう男が見知らぬ女に出会うところは、神話的なものを感じさせ、そ

れが神戸という土地とも響き合っているように思う。意図的に省かれた六甲山に少々あざとさを感じないでもないが、受賞作とすることに異論はなかった。

田中氏の「バナナ農園」は、繊細な筆致で農家の男と若い女子学生たちとの交流を描き出しているが、典型的な群像劇の域を脱していない。バナナの皮を切り刻む少女だけが、集団内で孤立した人物であり、

むしろ農家の男よりはこの少女の方に焦点を当てるべきだった。少女を曖昧に受け入れる語り手の目は、あくまで彼らの平面的な関係性を映し出すに留まっている。このような語り手への不満は「猪狩り」にも感じた。私小説としての系譜を踏むべきこの小説が、あくまで主人公を突き放した第三者の冷たい目で語られることが、私には不満であった。

樺野氏の「センチメンタル・

「レイン」は秀作である。古典的な男女の姿を投射する雨の描写は、ともすれば単調になりがちな小説世界に広がりと深みを与えている。前作の「土禁」よりも練り上げられた作だと思う。惜しむらくは、最後の安易な和解と認容の提示で、それがこの作を観念的な世界に閉じ込めてしまっている。この作品にはむしろ、男を突き放した着地こそが必要だったのではあるまいか。

白田氏の「漂白」は、幼さばかりが目についた。主人公の少年と父親との確執がエディプスの図式に収斂されるものでしかなく、読後に残るのは妙な古臭さと未熟さである。漂白というには、染みが目立つ作品である。

近年では、賞の大衆化だとか話題性重視だとか世間で騒がれているようだが、ぜひとも一度討議の様子を見てもらいたい。重厚な名作と話題性

というのは対立関係にあるものではなく、しばしば両立するものなのだ。活字離れの世の中、その活字で飯を食っている身としては、この人が受賞すれば話題になるかというやましい気持ちは一切浮かばないわけでもないが、やはり作品の質こそが第一であるという信念は、一瞬たりとも忘れてはならないと改めて身が引き締まる思いである。

選後感

鮭山 腹美

「六甲山帰り」は、モノクロな作品世界の透明感が胸に染み入るように入ってきた。淡々とした語りと停滞した時間が、神戸という歴史的な地で展開されることによって、静かな男女の交流にどこか日本的な美すら覚えてしまう。「バナナ農園」は、巧みな筆力に舌を巻いた。作中に溢れている若者の活気は、単なる

青春小説とは違い、時代に対するかすかな屈折を孕んでいる。平和な世界の停滞、樂觀に滲む不安は、まさに現代の亀裂を鮮明に切り取っている。前作の「郵便配達員」のときから田中さんには注目していたが、いよいよ本領を発揮してきたなという印象だ。「六甲山帰り」と「バナナ農園」で迷ったが、小説世界の奥行きという点では前者に軍配が上がると思った。「センチメン

タル・レイン」は、男との決別を経た女が、精神的にはその男との非接触型の恋愛を繰り広げるところを面白く読んだ。ただ、そうして繊細に積み上げられた男との非接触の和解が、最後に単純な接触の形で実現するのが、本作を卑小でちぐはぐなものにしてしまっている。「猪狩り」は過度にハードボイルドな文体が目について、中身の印象が削がれている面がある。貧弱な文

学青年の夢に猪が現れるという筋立てには、小説の萌芽を見出すことができると思うが、夢の中の猪を狩るラストの展開が物足りない。実体を持たない猪が現実に着地する機会を逃してしまっている。実に惜しい作品だと思った。

「漂白」は全体的に文章の拙さが目立つ。文学を表面的になぞっただけで、新たな文学を生み出す土台に踏み込めていない。父から逃避する主人

公の目線も単調で、作者の若さゆえの粗削りとしても粗が目立ちすぎている。上辺だけの題材や言葉を並び立てるよりも、白田さんの深部にある文学を掘り上げてもらいたいと思う。

初選考会を受けて

美田民 苫戸

初めて選考委員になり、緊張した。選考会では、各委員が強い情熱をもってこの賞に

臨んでいると知り、興味深さ
と一種の喜びを感じつつも、
よりいっそう気を引き締める
こととなった。文学というも
のはどうしても相対評価にな
る運命なのだが、その中でも
なるべく個人的嗜好と批評と
を切り分けて、作品本位な評
価をするよう心掛けた。

一番に面白く読めたのは、
「猪狩り」だった。弱肉強食
に直結する草原という場で繰
り広げられる、静かな絶望と

情熱・野性と人性とのせめぎ合いに感じ入った。文学にしか成立させられない世界に我々を誘ってくれる、まさに小説らしい小説だと思った。私はこの作品を一番に推したが、選考会で評価する意見はほとんどなかった。

「センチメンタル・レイン」は力作だが、少々美しくまとまりすぎていて、安易な男女の恋愛小説に堕してしまっている。「バナナ農園」は読みや

すい作品ではあるものの、熟した甘美なバナナの重厚な描写に対し、切り刻まれて黒ずんでいく皮の挿話があまりにも軽い。両者とも作者の才気に疑うところはないだけ、従来の枠組みの中に収まっている印象を強く受けた。

「六甲山帰り」は、おそらく意図的に登山の記憶を空白にしているのだろうが、むしろ焦点をぼかされているように感じられた。肉眼に焼き付

いた美しい山岳にピントを合わせた方が、男女・生死・往復・山海といった多重的対立関係が鮮明に浮かび上がったのではないだろうか。

白田氏の「漂白」は、ペンキ職人の父への葛藤を抱えた少年が、父の仕事着を漂白する場面に寓話的なものを感じなくもないが、類型のパッチワークの中でアイディアのみが上滑りしている印象を受けた。今回、初めての選考会にあ

たつて、候補作をいただいたその日のうちに全ての作品に目を通した——ちょうどその日は帰省予定で、電車の中で読んだ——のだが、個々の技量の高さの割に、後日まで鮮明な像を描く作が少なかったのは少し残念であつた。

核なき作家

月見 場亜我

樺野氏の「センチメンタル・

レイン」は、女の持つ抒情性

と驟雨との響き合いが凡庸に思われます。情夫を捨てた女の描写は、前回の「土禁」と共通するものがありますが、「土禁」の方がまだ幾分か生硬ながらも情念がこもっていました。「六甲山帰り」は、病を抱えた女の表象が、むしろ作中に現れぬ六甲山の悠々たる姿を濁らせていて、作品を二流に押し下げていると思われてなりません。

今回は特に推したいと思う

作品がありませんでした。技巧を凝らし、奇を衒つたものが多く、個々の筆力は認めるに足るとしても、小説自体から受ける印象は乏しいと言わざるを得ません。自身の核を持たないのが、平和な世の中で育つた現代の作家の弱点なのかもしれません。個々の文学の核が何か、改めて向かい合う必要があるでしょう。

朝にパン

荷輪治吾郎

甘いものが食べたかった。食堂で夕飯を食べた帰り道、デザートになるものを求めて駅内部のパン屋さんに寄った。以前同じような時間帯に通りがかった折に、このお店ではタイムセールが行われているらしいと知っていたからだ。なるべく安価で甘いものを。そう思ってお店に入った。今は秋、食欲の秋。棚には秋のおいしい食べ物を使った期間限定のパンが並んでいた。人は季節ものに弱い。少なくとも私はそうであるため、自然とそちらに目が行く。中央の台の上、秋の味覚を取り入れた様々なふくらとしたパンが、橙色の照明の光を受けている。普段パン屋さんでパンを買うことの無い私の目に、魅力的に映る。甘いパンを一つだけ。そう決めていた心が揺らぐ。そういえば明日の朝ごはんが無いな、と思ったのは、この欲を正当化するためだったのかもしれなかった。結局、五分ほど店内をうろついた末、二つパンを買うことにした。一つはチーズたっぷりのこピザ。直径一五センチほどのピザの真ん中にきのこがちよんと乗っている。きのこことパンという組み合わせに惹かれた。チーズの焦げ目が、俺は旨いぞと囁いている。朝ごはんにしようと思った。もう一つはスイートポテトデニッシュ。ピザの直径と同じくらいの長さをしており、表面には黒ごまがばらばらと散らされている。さつまいもなので甘いのは確実であり、

なおかつ食いである。価格が比較的優しかったのが決め手だった。安めのパンを選ぶから、もう一つパンを買ってもまだ大丈夫、と言い訳が出来る。何が大丈夫なのかは知らないが。

お会計を済ませてほくほく顔で帰途につく。家に着いていざデニッシュの入った袋を開封しようとした時、自分の中にあつた甘いものを食べたいという欲がしぼんでいるのに気がついた。特別な買い物をした、という事実で満足出来たらしい。ならばこのデニッシュをどうしようかと考え、きのこピザとともに明日の朝食とすることにした。せっかくなので、久々にちゃんと温めて食べようと思った。ついでにスープ的な物も飲めたら最高だ。にこにこしながらパンを冷蔵庫にしまった。ちなみに、甘いものを摂取するという決意自体に変わりなかったなので、買っておいだ甘酒を温めて飲んだ。この甘味、どうしてかみたらしの甘味を想起させる、と思いながら飲んだ。味の感じ方がおかしくなっていないか、と、我ながら不思議に思う。

翌朝、もとい先刻。パンを加熱するのに必要な金属プレート洗った後、レンジにセットする。取り出したパンをプレート上に並べて、説明書を見ながら操作する。加熱を始めてしばらくすると、パンの香ばしい香りが台所に充満した。これだけでだいぶ幸せな気分になれる。ぼーっとし

ているとレンジが音を立てて止まった。その数秒後に小さな破裂音がしたので、あわててレンジの扉を開く。ピザが爆発したのかと焦ったが、そんなことは無かった。いそいそと花の絵があらわれた平皿にパンを乗せる。デニッシュの表面がやや焦げてしまったが、およそ問題無く温められていた。本当はスープと一緒にいただきたこうと思っていたが、加熱されて照り輝くパンを前にして、今すぐ食べたいと思う心は止められなかった。窓際の椅子に腰かける。予報では今日は雨だと聞いていたが、今は日が差していた。日光の温みを背に受け止めながら、ピザパンに口をつける。もちりとした生地には黒ごまのようなものが練り込まれていた。チーズの旨味を味わいながら食べ進めていくと、お待ちかねのきのこに行き当たった。生地のもちもち食感に、きのこの控えめな歯ごたえが加わる。このきのこは、まいただろうか。きのこは他の食材とともに用いられた時、その真価を発揮すると私は考えている。このチーズピザに乗せられたきのこも例外ではなかった。いつかきのこを使った料理を作ろうと決意しながら、きのこピザを食べ終えた。ノータイムでデニッシュを手取る。一口かじると、ぱりぱり感を取り戻した生地の層が立てる軽やかな音とともに、さつまいもの優しくしかし確かな甘さが感じられた。黒ごまの風味も良い。

デニッシュも温めて正解だったな、デニッシュ生地を考えた人は素晴らしいな、と思いながら、少しづつ食べていく。完食後、やはりスープが飲みたいので、マグカップになんちゃってトマトスープを作り、冷ましながらちびちび飲んだ。作り方については、マグカップにスープを入れてある時点で若干お察しだとは思いますが、料理好きな人やちゃんと料理をしたい人の反感を買いそうなものなので、ここでは伏せることとする。贅沢に時間をとって朝食を食べるのは久しぶりな気がする。心が満ち足りる、素敵な朝食となった。

二〇二三年一〇月二七日朝

漠々

荷輪治吾郎

大きな水の塊が立てるような音が聞こえた時、私の頭の中で、くじらが水面に落ちた。音のした方を振り返る。たぶん、私の横を流れる川の上流の方。立ち止まる。じっと見る。けれど、暗い中では、遠くの川面の様子は見えなくて、結局何もわからない。仕方が無いので、前に向き直って歩き始める。

大学からの帰り道。雨はしとしと降っている。もう冬だから、風は冷え冷え吹き渡る。手袋をしていても、指の先が痛んだ。その節は、川に落ちている石みたいだな、青黒い色をしているだろう。一刻も早く家に帰りたいけれど、それはもう少し先になる。買い物に行かないといけないのだ。大学で食べるお昼ごはん用のパンが要るし、もうじき家のお米が底をつくから。予備のお茶も買わないと。余計なお買い物はしないように気をつけなきゃ。

買うべきものを考えながら、信号が青になるのを待っている。自動車が目の前でゆるやかに曲がる。そのヘッドライトの先で、雨粒がちらちら白く光る。マリンスノーの浮かぶ深い海で、大柄な魚が目だけぴかぴか光らせて遊泳している、ような、そんな幻を見た。きつと、雨降りの夜の中にいるせいだ。それと、ちよっとおながが空いているせいだ。おながが空くと、かなしくな

る。かなしくなると、思考が鈍ってしまつて、うまく行動出来なくなつて、ますますかなしくなる。こんなかなしさをごまかす方法で私知っているのは、ごはんを食べること、眠ること、それと、夢を見ることだ。意味も正しさも無い、美しいばかりの幻想を、少しでも現実を持ち出してみるのだ。だから私の頭は今、空想の海を思い浮かべるのに夢中になっている。と、信号が青に変わった。よちよち足を動かして白線を渡る。

スーパーマーケットの雨よけに入つて。畳んだ傘をふるふる揺らす。大きな窓明かりが眩しい。あくびをして潤んだ眼には、余計に。困ったことに、手のかじかみと空腹に加えて、眠気もやってきていた。早く家に帰りたい。うん、早くお買い物済ませて、家に帰ろう。カゴを手にとって、目的の棚から棚へ移動する。別段必要じゃないものは視界に入れないように。けれど習慣とは恐ろしいもので、普段寄っているお総菜コーナーにもつい足を運んでしまった。揚げ物の色と匂いに、胃袋がきゅるりと身じろぎする。我慢しなきゃという考えから、値引きシールを見て、空腹に負けて、屁理屈こねて、とうとう、一番費用対効果が高そうなものなら買ってしまつてもという考えに移つた。あっちへうろうろ、こっちへうろうろ、お総菜コーナーを歩き回る。

その自分の姿が、ばら撒かれた餌の周りを回る魚の姿に重なった。ただ、実際それをしているのはかわいげのある水の生き物ではなくて、成人済みの人間なので、だいぶ恥ずかしい。なんとなく店員さんの目も気にする。なので、ぱぱと目の前にあるものを手に取った。ほくほくコロツケ五つ入り。ご飯だけでは物足りない時の心強い味方なので、気に入っている。ちよつと油が染みてしんなりした紙袋をカゴに収めた。そして、これ以上は買うまいと頭の中で唱えながら、レジへ急いだ。

外に出る。小雨はまだ止まない。暖かい店内に慣らされていた頬が寒さに萎縮する。右肩には、パンと二リットルのお茶入りのバッグ。左肩には、コロツケと二キログラムの米袋入りのバッグ。両肩に掛かる重さがだいたい同じくらいになるよう引っかけて、ゆらゆら歩く。冬風でおでこが冷やされていく。今日もまた買わなくてもいい食べ物を買ってしまったなあ。眠たいなあ。早くごはん食べたいなあ。肩が重いなあ。取り留めの無いことばかりが、冷たいおでこの裏で浮かんでは消える。デキる大人は、こんな何でもない帰り道の時間だって、明日のこととか、仕事のこととか、実のあることを考えるのに使うのだろう。私はいまだそう在れないでいる。ち

よつとだけ肩を落とす。いや、両肩の荷物のせいでもう下がってはいるのだけど。

そうこうしているとアパートに着いた。玄関のドアを開く。一拍遅れて点いたオートライトに出迎えられる。うん、ただいま、今日も寒かったよ。濡れた傘は開いたままドアノブに引っ掛ける。体の両サイドに荷物があるせいで狭くて歩きづらい廊下を、のそのそ進む。「ひえー、さみいよ」なんて声が出る。まあ聞く人もいないのだけど、なんて心の中では思う。明かりを点けて、人ひとりが暮らす空間。もう見慣れてきた部屋だ。バッグ二つ、リュックサック、パソコン用バッグ。大学生らしからぬ大荷物を下ろした。周りの大学生は大体かばんかリュック一つで行動している。みんな、要るものと要らないもの、大学の限られた時間で出来ることと出来ないことを判断するのが上手なのだろう。

外套一式を玄関のポールハンガーに引っ掛けて手を洗ったら、冷凍庫からカチコチのご飯を取り出して、電子レンジの中に。五〇〇ワット、四分半で温め開始。暗い廊下に、四角いオレンジの窓明かりが灯る。その間に、買ってきたものを仕舞う。コロッケは三つを深めの平皿に移してラップをかけ、冷凍庫の中へ。明日のごはんのお供とするのだ。一度冷凍されたコロッケは、レ

レンジで温め直すと、心なしかもちした食感になっている気がする。最近発見した、生活に細やかな幸せをもたらす小ネタだ。もつとも、他のお店のコロッケで試したことは無いし、厳密に温め方を定めているわけでもないの、あんまり再現性は無い。何をおいしいと感じるかは私の主観でしかないし。

晩ごはんを食べる間に洗濯を済ましておきたくて、衣服やタオルを洗濯機の中に放り込んでいく。洗剤を注いで蓋を閉めた時、少し前に温めを終えていた電子レンジが、早く中身を取り出せと言うように、びびびと音を立てた。「はいはい、お待たせ」あちあちのご飯を取り出す。人は一人で暮らしていると独り言が増えると、いつかのどこかで聞いたことがある。私もその一人らしかった。家電に話しかけることが実家にいるときよりも増えた気がする。一人が寂しいわけではないけれど、人でなくてもいい、誰かと暮らしを共にしているような、そんな仕草をする方が、生活がちょっと楽しくなるので。

そういうわけで、沸騰してびーびー騒ぎ立てるやかんに「待って待って」と言いながらIHコンロを止める。お味噌汁を作るのだ。市販の小口切りのネギ、乾燥わかめ、小さいスプーンです

くい取った味噌を入れた器に、お湯を注いでかき混ぜるだけの、簡単お味噌汁。お手軽で大変よろしい。コロッケをレンチンしても良かったけど、お腹を満たしたいという欲がいよいよ大きくなってきたので、そのままご飯とお味噌汁と一緒に運んで、席に着く。「いただきます」まずはお味噌汁を一口、それからコロッケをおかずにほかほかご飯を食べる。「うま〜……」コロッケは大体じゃがいもから出来ているので、炭水化物で炭水化物を食べていることになるけれど、食べられるのだし、おいしいので何だっていい。

人の声はしない部屋の中で、黙々と箸を進める。ドア越しに、洗濯槽が回る音、その中で水がぶつかる音。窓越しに、歩いていた時よりも強くなった雨脚、それが建物や道を叩く音。こうして一人で静かに食事をする時間を、私は気に入っている。それに、洗濯をこなしたり、アイロンがけをしたり、部屋を掃除したりするのも、嫌いじゃない。生活を維持するための活動をしている間は、なんというか、人としてふさわしく生きているような感覚が与えられているのだ。一方で、この部屋に引っ越してきてから、半年ほど。故郷を離れ、一人で生活をしているのを、いまだ夢のように感じている節がある。生活の活動をする中でときたまこの現実が気がついては、飽

きもせず驚いている。そして不思議な気分になった私の頭には、最近お決まりの空想が浮かぶ。人一人が暮らすこの部屋は、独りで暗い海の中を彷徨う潜水機のようなものである、と。そして、私はその唯一の乗組員で、世界の冷たさや重さから隔てられた閉鎖的で小さな舟で細々と活動しながら息をしている。そんな人生を夢見る。実際は潜水艦の中の生活は過酷なことだから、これはしようもないいち文系大学生のイメージに過ぎないのだけど。

窓の方を見やる。閉め切ったカーテンの向こうには、真っ黒な景色と、家や集合住宅の窓明かりがあることだろう。その明かり一つ一つが誰かの営みの証なのだ。そこで生活している誰かが放つ光なのだ。空想の枝葉を伸ばす。舟の窓から、遠くに光る無数の舟の窓明かりを眺める。世界にたくさんの人が生きているのを確かめながら、その光とは触れ合うこと無く、この舟での生活は続いていく。なしたことも、日々考えていることも、ただ私の生活を支えるためだけに在り、この空間の内側で完結していく。

なんて感傷にふけていたら、洗濯機が一仕事終えて私を呼ぶのが聞こえた。早く干さないと生臭くなって、顔をしかめる羽目になる。晩ごはんも食べ終わっていたので、丁度いい。あくび

をしながら音のした方へ向かう。洗濯物を干したら食器を洗って、あったかいシャワーを浴びて寝支度をして、お布団に包まって眠りに就こう。眠ること、夢を見ることは、氣力を補充する大事な人間の仕組みだ。日付が変わってしまう前に目を閉じよう。明日また生きるためにも、何か明るい夢を見れたらいいな、なんて思いつつ。

空想の秋

はにほ

私曰く、秋は最高だ。

快適な気温、美味しい食べ物、そして、あたたかな色合いに似つかぬ寂しげな空気の匂い。命の危険を感じさせる灼熱の夏と、全てを凍てつかせる厳しい冬の間に存在するゴールデンシーズン。一年という大きなひとまとまりの内で、ほんの少ししか採ることの出来ない希少部位。それが秋。

食欲の秋、芸術の秋、睡眠の秋、読書の秋……秋にも色々あるけれど、私はよくばりなので、今日という日を使って全てを満喫することにした。

朝八時、起床。休日の私にしては割と早起き、かといって早すぎもせず良い時間。顔を洗って歯を磨き、身支度もそこそこにキッチンへと向かう。朝ごはんは固焼きの目玉焼きを乗せたトースト、レタスとトマトとキュウリのサラダ、それとインスタントコーヒーに牛乳を注いだだけの冷たいカフェオレ。そこまで凝ったものではなくとも、これだけの朝ごはんを準備しようと思うと相当なやる気と根気が必要だ。ちゃんとした朝ごはんとは、贅沢なものである。

テレビをつけて、なんとなくやっている番組をみる。土日の朝は大体、路線バスぶらり途中下

車の旅をやっている。それが芸能人の対談番組。もしくはガーデンング、囲碁の中継。とにかく、休日の朝に見るテレビというのは、意思をもって見ているわけではない。

朝九時半。朝ごはんの片づけをしてから、さて何をしようかと考える。そういえば、読もうと思って買った方がいいが読んでいない積読がたくさんある。それらを読むことに決める。

本を読む体勢というのは何がベストなのか、私はいまだに分からない。外だともちろん電車の中で立ち読みしたり、机で座って読んだりするけれど、家の中でそれをするとは何か損した気分になる。せっかく寝ころべる環境があるのだから、横になるなり斜めになるなり、もっと楽な体勢があるのではないか？　そう考えて色々試してみるのだが、横とか斜めとかになつて本を読むと、どこかしらが痛くなる。首だったり手だったりがしんどくなって、結局もぞもぞしてしまい、やっぱり縦が一番だな、という結論になる。もつたいないことだ。誰か、読書をするのに一番楽な体勢を知っていたら教えて欲しい。

そうこうしているうちに昼の十二時になる。本があと十数ページで一冊読み切れそうなので、キリの良いところまで読んでしまおう。

十二時半。昼ごはんの時間だ。しかし困った、何か作ろうという気持ちにならない。まあそんな時もある。

そこで、ある飲食店のことを私は思い出す。いつも外に出ると通りがかかるけれども、まだ行ったことのないカフェ。あまりに家から近いのと、雰囲気があって入りにくいこともあり、中々行く機会に恵まれない。物理的な行きやすさを加味すると、ある意味どこよりも遠い存在といえるかもしれない。外に出ている看板によるとカレーライスもあるらしいので、昼ご飯に適しているだろう。

いつも外食ばかりしてはいられないのだが、私は今日を満喫すると決めた。きっと許されるに違いない。私は今度こそ丁寧に身支度をして、ちゃんとした服を来て、家からものすごく近いカフェ（カレーライスも提供している）に向かう。

十四時、カフェを出る。おなかも満たされて、程よい眠気が私を襲う。シャツと目を覚ますためにも、少し歩いて帰ることにする。今日は天気がいいし、うろこ雲もあって秋晴れを感じる。

カフェから少し離れたところに商店街があるので、そこを散歩して帰ろう。毎日登下校で通っ

ている道だけれど、私はこの商店街が大好きだ。

歩いていると、スーパーが目飛び込んでくる。せっかくここまで来たのだから、何か買って帰るのも良いかもしれない。特に目的は無かったが、私は立ち寄ることにする。

入り口すぐの野菜コーナーの所で、カボチャが売られているのが見えた。その瞬間、私の頭の中にボンッと現れたのは、オレンジ色のカボチャマフィン。な、なんて魅力的なんだ……これはなんとしても作りたい。スマホで軽くレシピを調べてみると、ホットケーキミックスがあればカボチャマフィンが作れそうということが分かったので、製菓コーナーに行つてホットケーキミックスもカゴに入れる。その近くにはデコレーション用のチョコペンや粉砂糖も置いてある。やはり、お菓子を作るならカワイイ方が嬉しいに違いない。それも買うことにする。

十五時、帰宅。買ったものを冷蔵庫などにしまい、早速カボチャマフィンを作り始める。

卵はあらかじめ溶いておき、一口大に切ったカボチャをラップをかけてレンジで加熱。柔らかくなったらフォークなどで潰し、ペースト状になったら砂糖、牛乳、溶き卵、溶かしバターを加えて混ぜる。型に入れて、予熱したオーブンに入れて焼き上がり待つ。

マフィンが完成するまでの二十分はとても長く感じる。平日の朝に目覚ましが鳴り、スヌーズを押して猶予を与えられている時の二十分と等価値とは、とても思えない。

ソワソワしているだけというのもあれなので、ゲームをして待つ。面白いノベルゲームをしている時の時間の溶け方は尋常ではない。その性質をありがたく活用させてもらおう。

予想通りすぐに焼きあがる。惜しみながらもゲームを中断して、ふんわりいい香りがするキツチンへ向かう。

開けてみると少し焼き色が足りないように思える。妥協しないぞ、と思いながら二分ほど延長。今度は、オーブンレンジの前でうろうろと、追加した二分を待つ。

ついに焼きあがった。オーブンを開けるときつね色の焦げ目がついた美味しそうなマフィン！粗熱をとってからデコレーションをして完成。記念写真も忘れずに撮っておこう。

焼きたてマフィンが二個も三個も食べられるのは家で焼いた人の特権。少々割高になったって、手間がかかったって、お菓子作りをする価値があるというものだ。

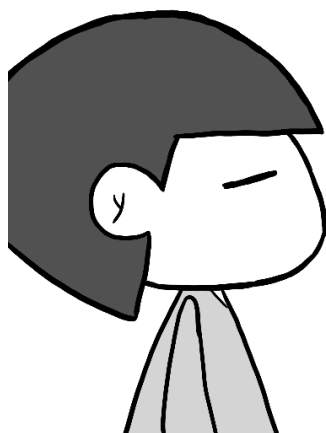
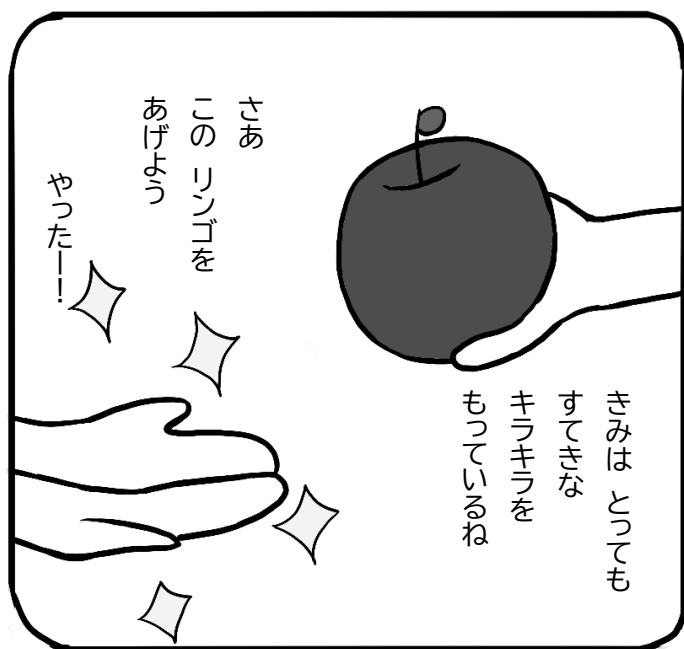
ああ、今日はなんて良い秋の休日なんだ……この後は夕食を食べてから、早くに寝る準備を済

ませて、ちよつと勉強してから、気持ちよく眠りにつくに違いない……

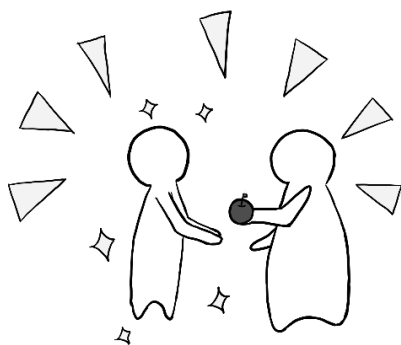
……という理想の一日を夢みながら、今日も私はスマホ片手に、一日中部屋に転がっていた。
惰眠の秋というのも、まあ悪くないものだ。

きんきん

なし



わあ すてきなあ

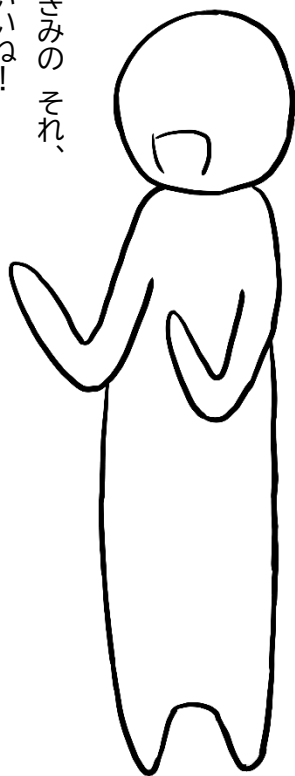


きらきら



ねえねえ きみの それ、
とっても いいね！
それを くれたら
キラキラを あげるよ！

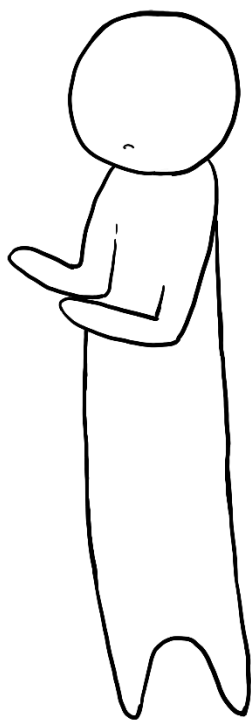
あ、いらないです



きらきら



.....え？



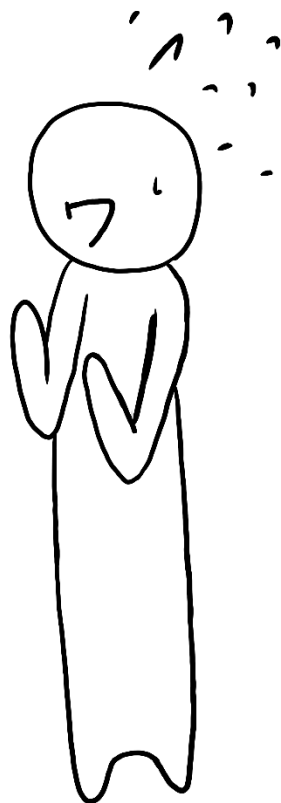
え、いや……ほしいよね？

みんなから みとめられて、

いいリンゴが もらえるんだよ

キラキラがほしくないとか、

なに言ってるかわかんないんだけど



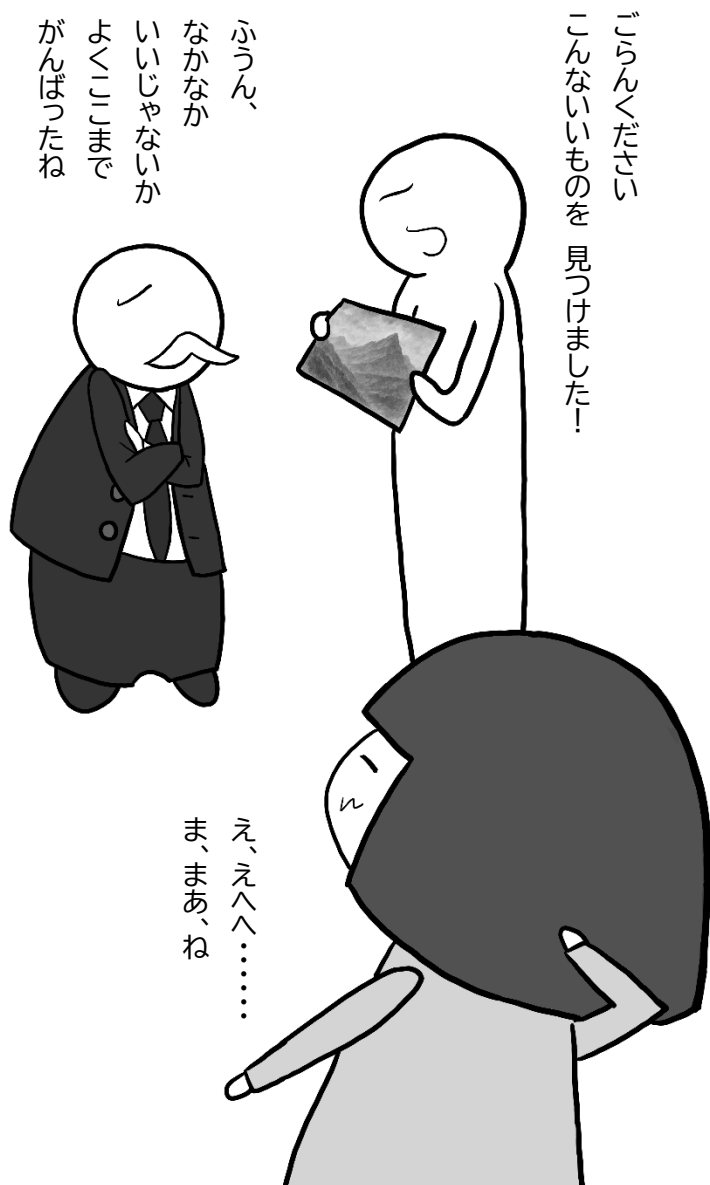
んー……



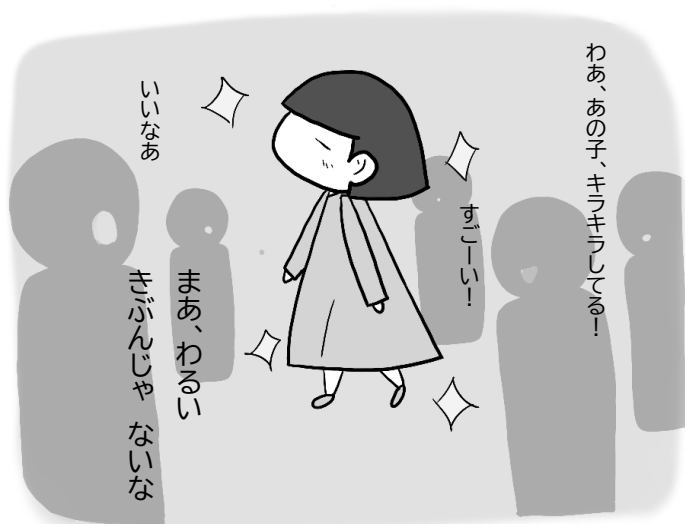
きらきら

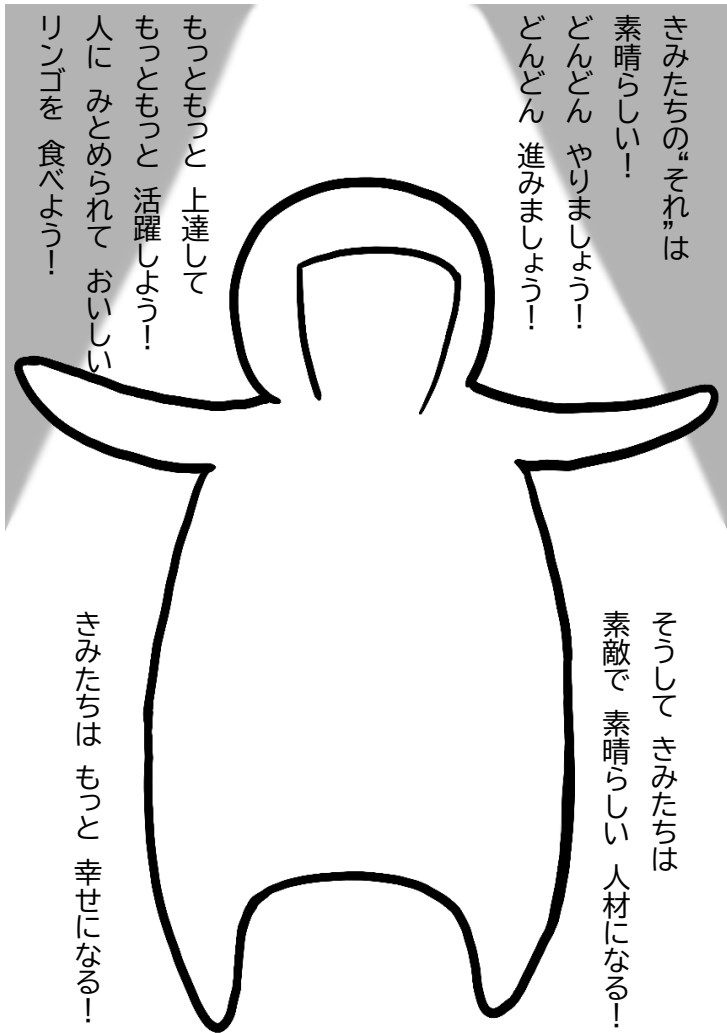
いいからおいでよ





きらきら

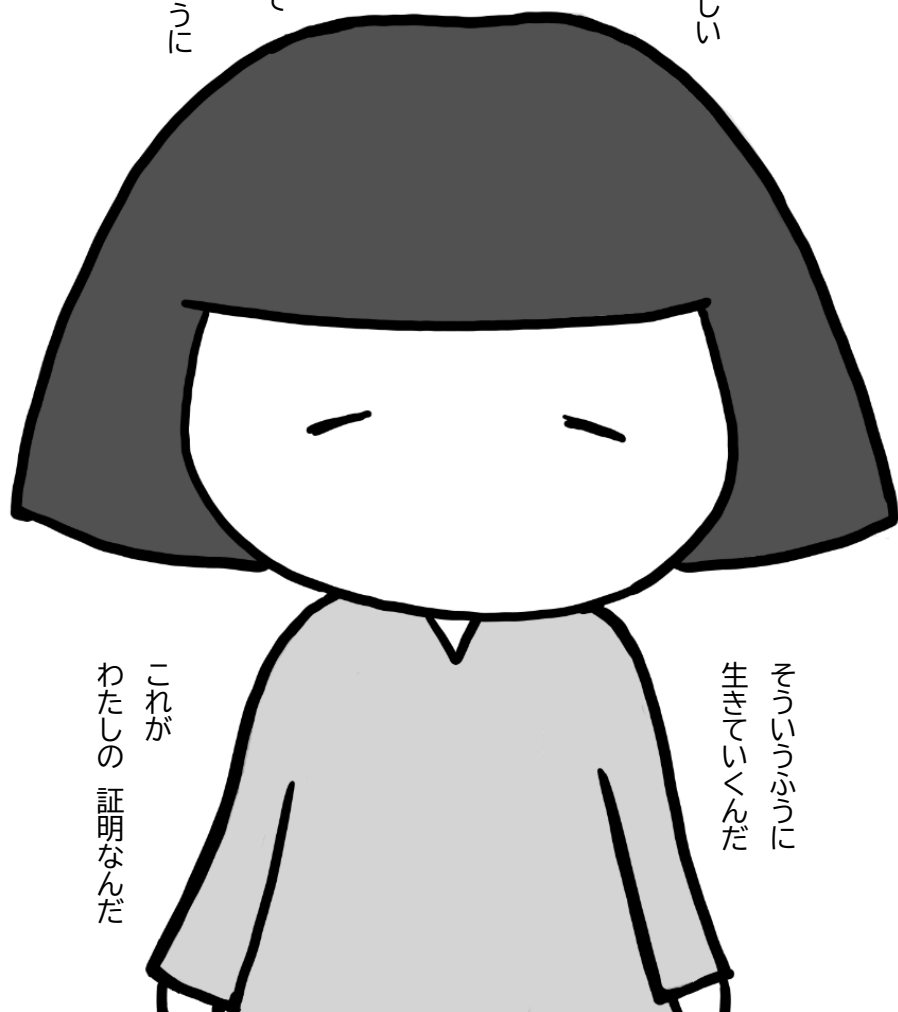




きらきら

そうか
それが 素晴らしい
ことなんだ
それが
いいこと
なんだ

もつと うまく
なつて、
もつと 成長して
もつと 人に
みとめられるように
なるんだ

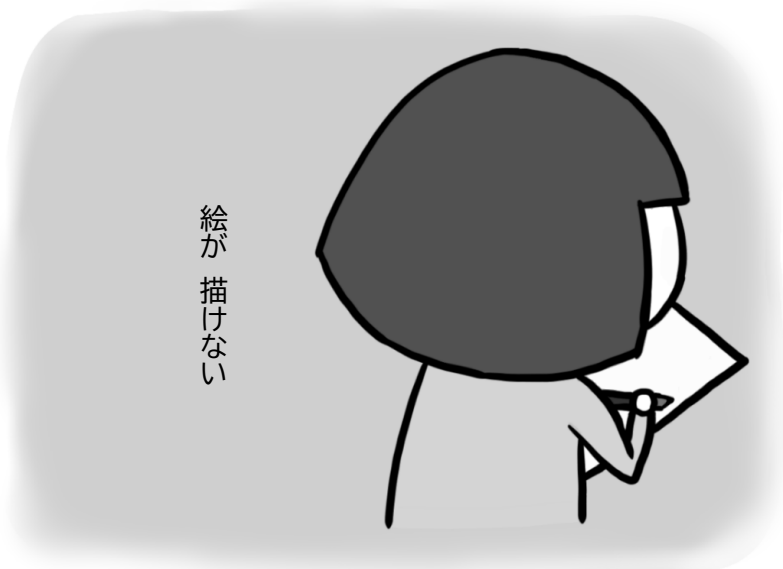


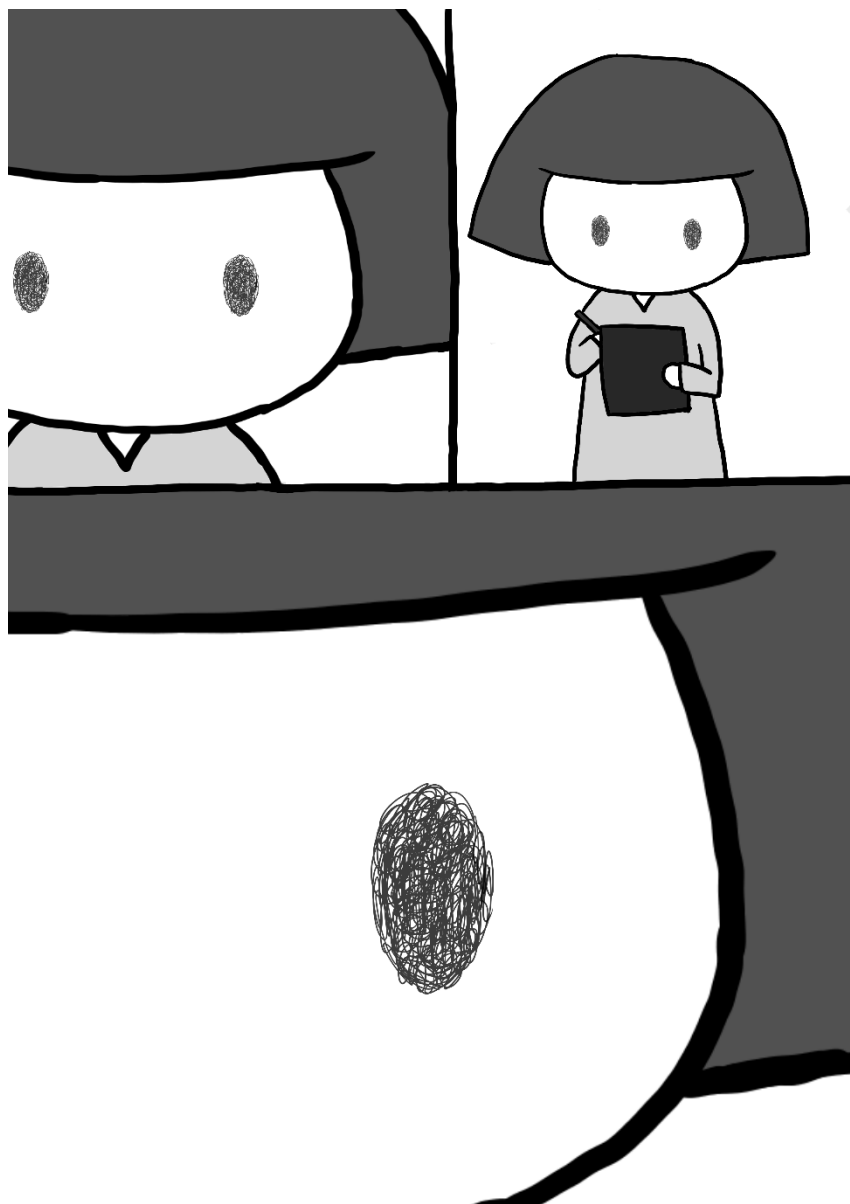
これが
わたしの 証明なんだ

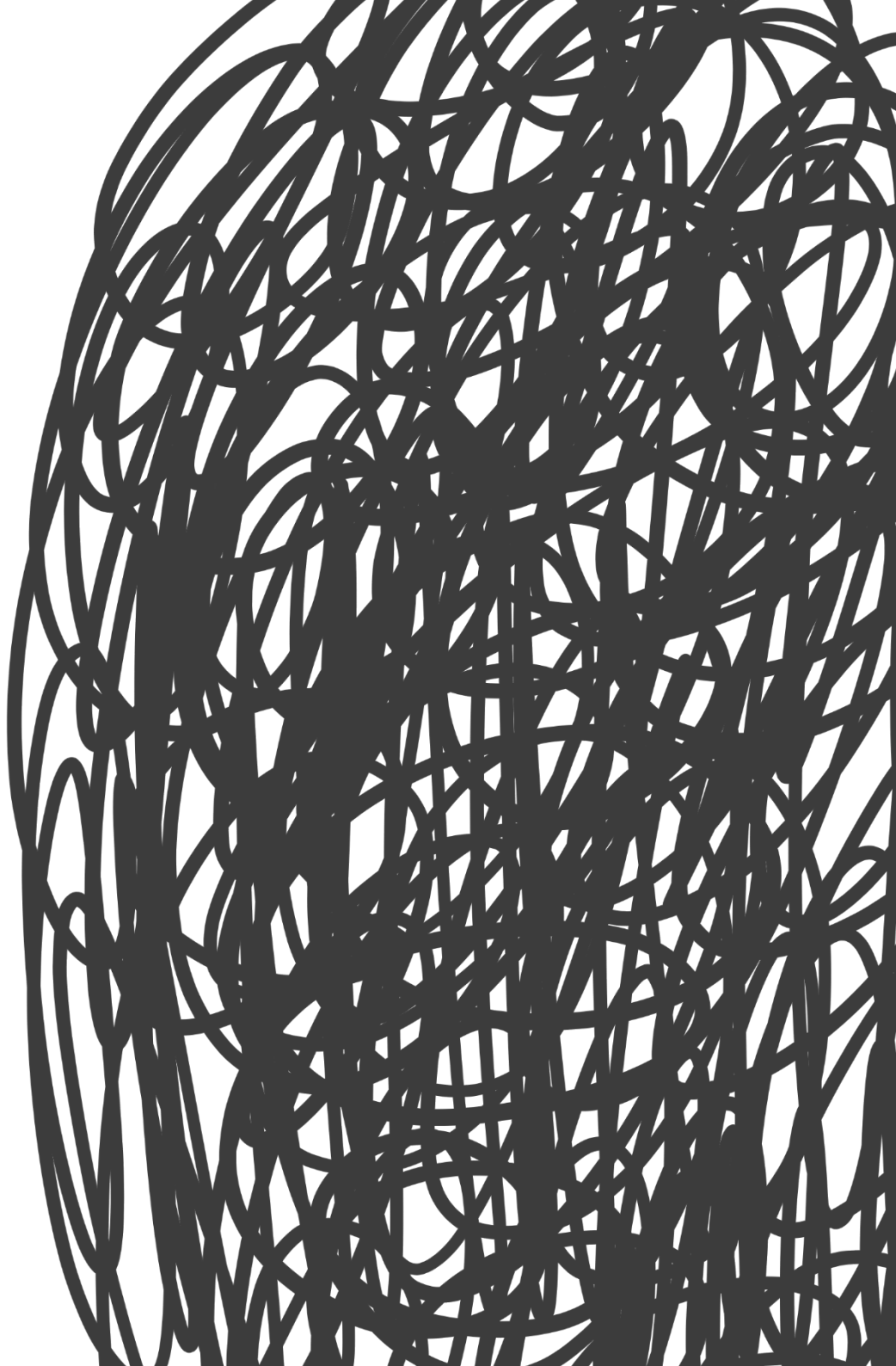
そついつふつに
生きていくんだ

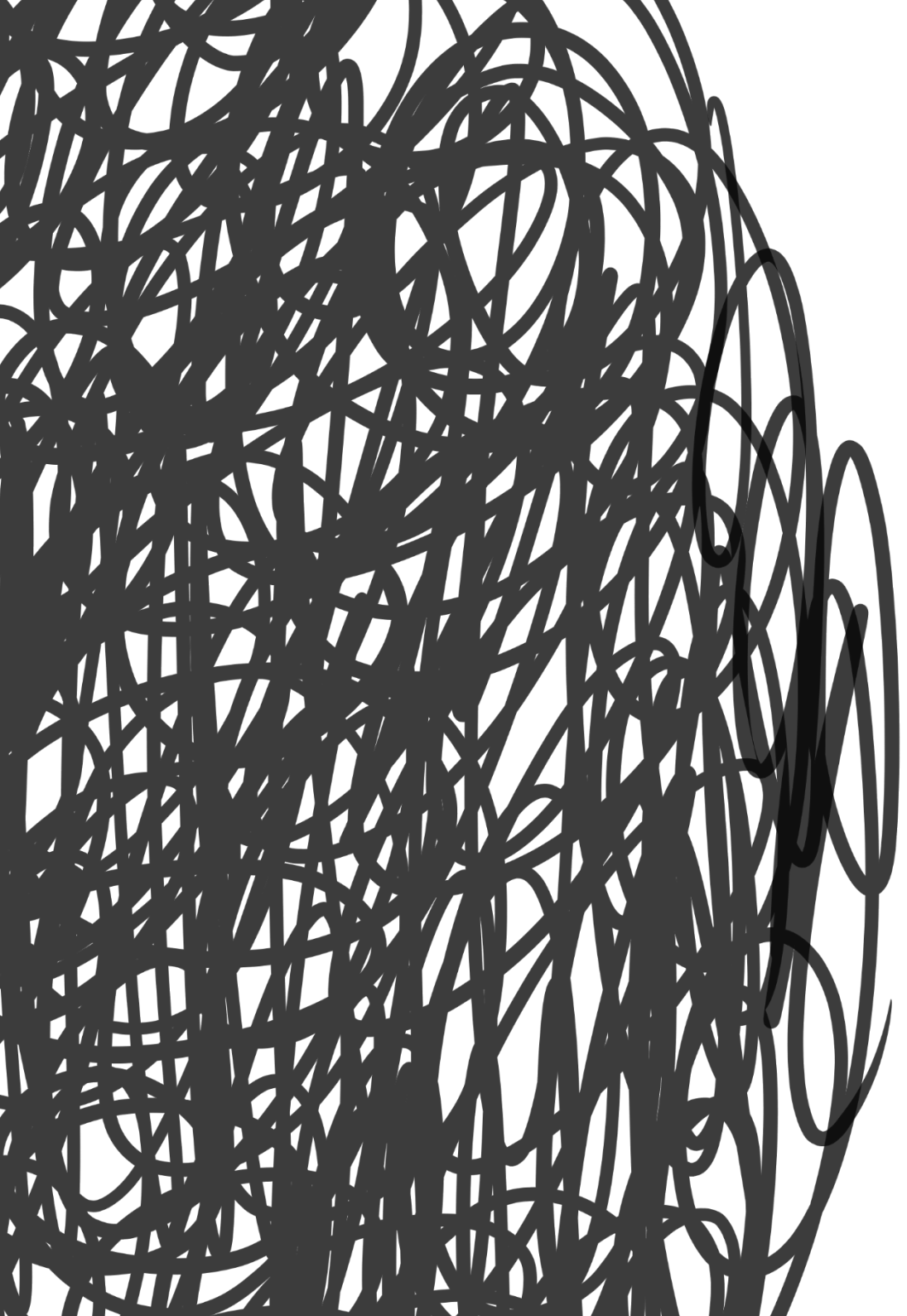


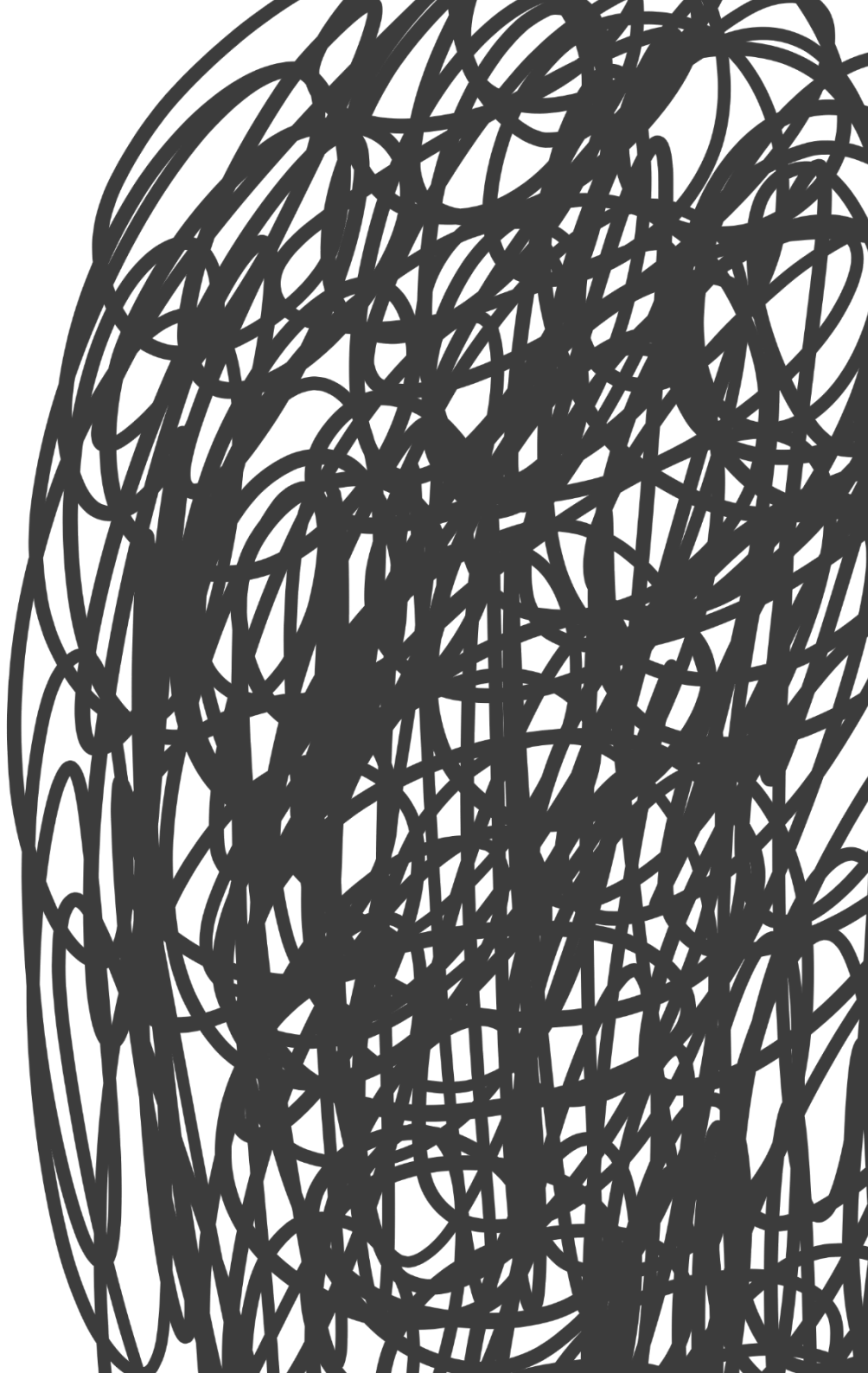
きらきら

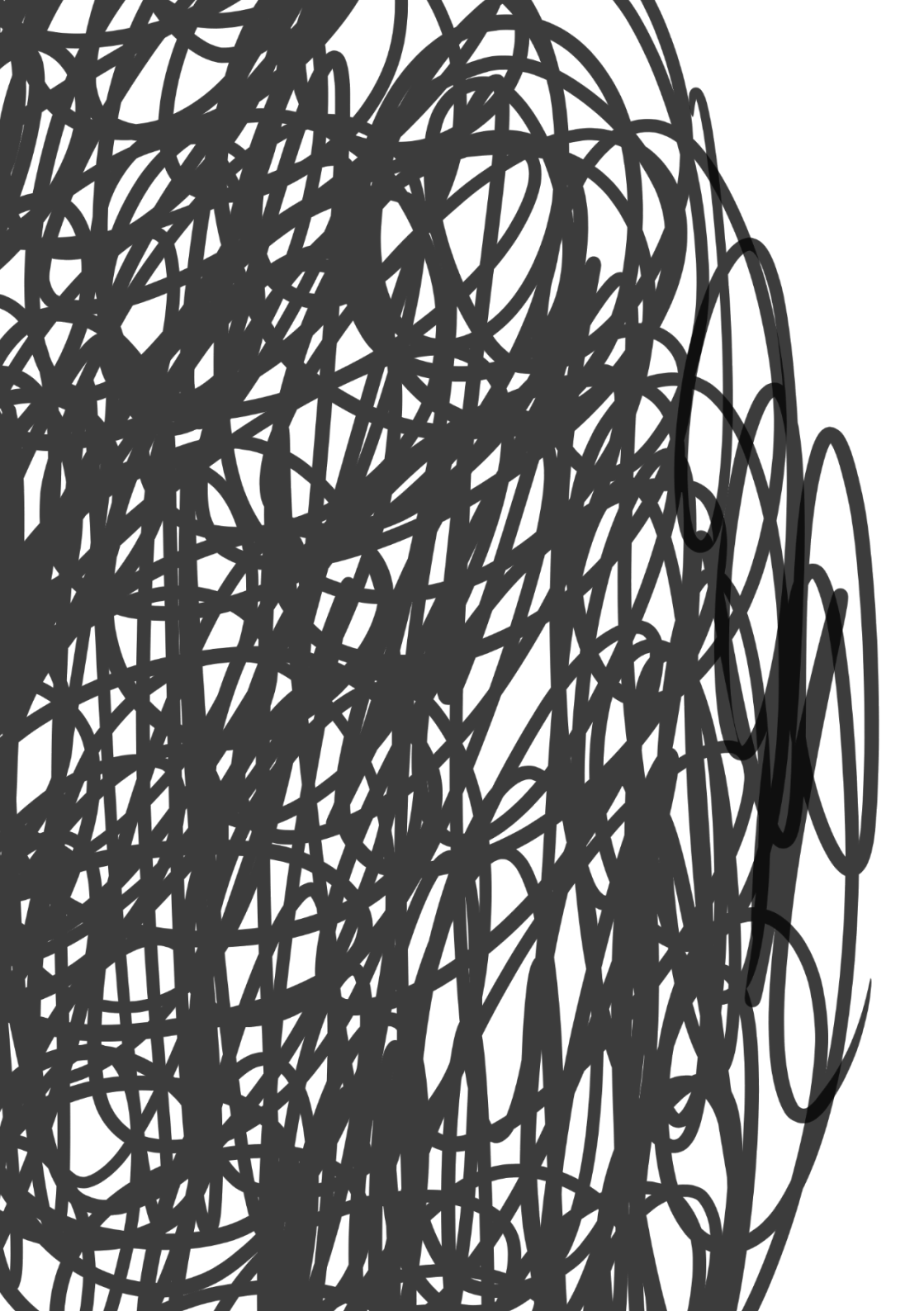


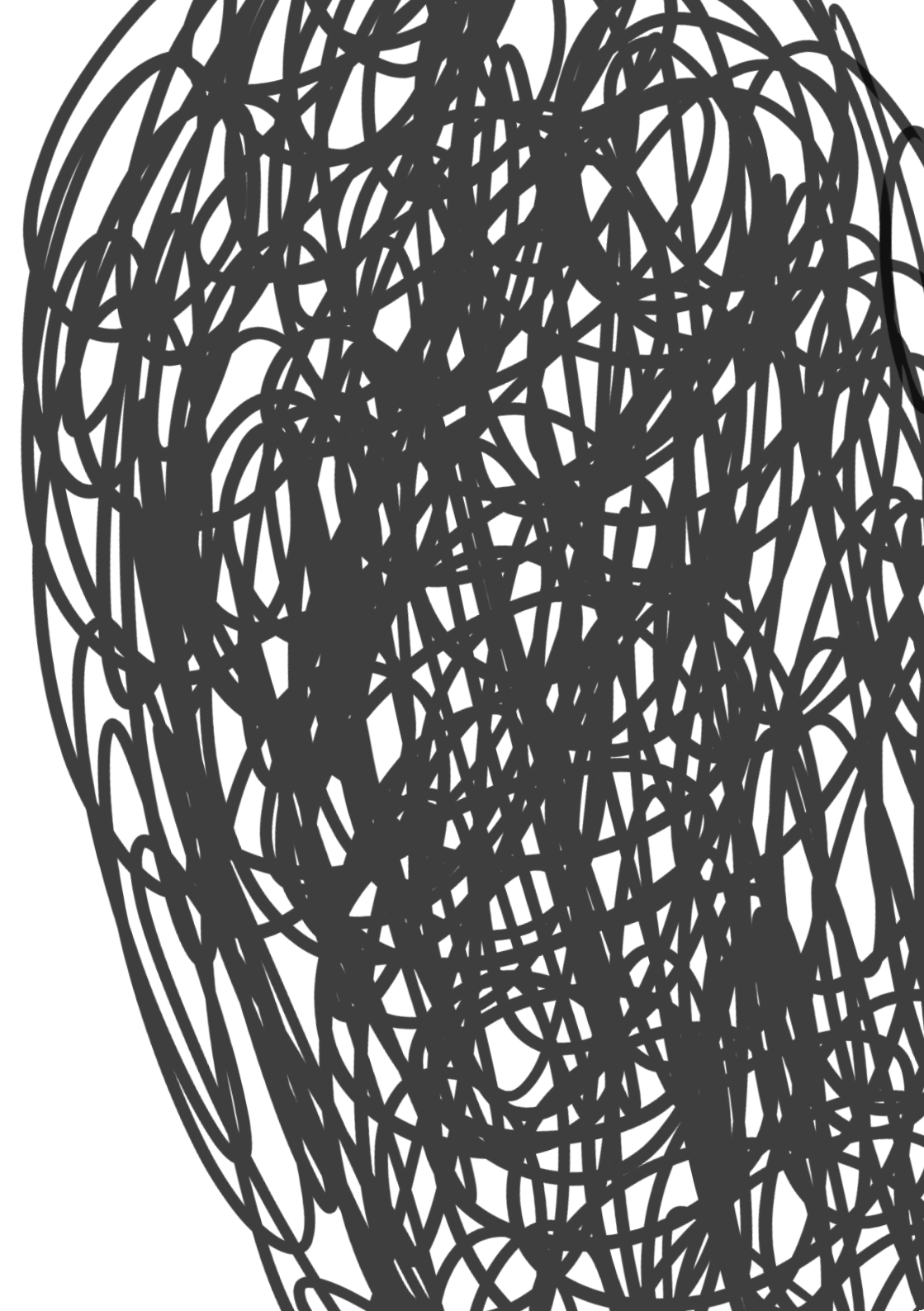






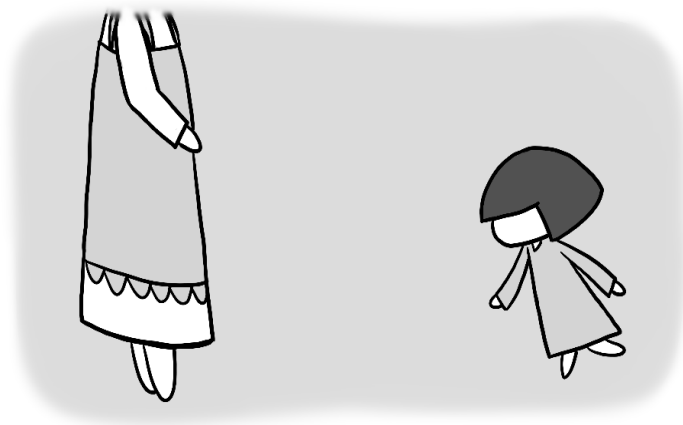






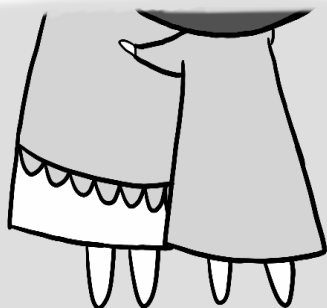






きらきら

ママ、わたし……



なんにもないまま
生きてても いいかな

わたしの絵 たとえ すぐったって
すごいって 言われるための ものじゃない

これでおいしいリンゴを 食べるくらいなら
なんにもないわたしで

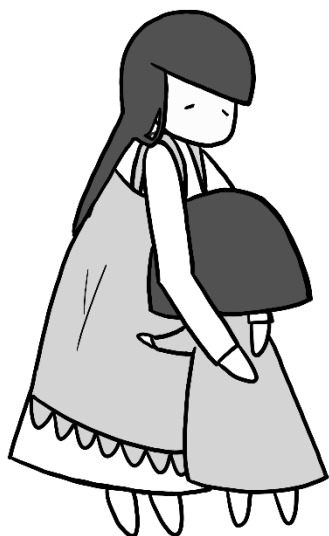


なんにもないねって 言われて
苦労したい

なんにもない はだかのわたしを
みとめてくれる人は いらないのかな

こんなので おかしいかな

……
リコ



きらきら

はだかんぼうで
生まれてきた ときから
あなたは ずっと
きらきらしているのよ





※P98 内の山の風景画は生成 AI によるものです。

臨界

親嘴鳴

踏切と青い光の殺虫灯

哀れな羽虫がちっとはじける

親嘴鳴

滅私集

後藤鐵三

序——（読み飛ばしてよい）

なにびともここを渡りぬくことはできない、いわんや死者のことづけをたずさえては。——君はしかし夕ぐれともなれば、君の窓べに坐し、あこがれながらそのことづけを心に思いえがくであらう。

手塚富雄訳 フランツ・カフカ「皇帝の使者」

ひとえに、滅私を目的として書き下ろされた。滅私とは、全生命的な死や、一つの文学的活動の終末を意味するものではない。また、なにがしかの給金のためにちつと堪える役人のような、冬眠的態度というものでも決してない。幕進のための一語である。

「私」の指すところは、個という語から限りなく離れた、拡散のかつ膨張的な意識であるといえるかもしれない。が、しかし、とりたてて「とはなにか」に沈もうとするような気分でもない。したがって、

「私」というあまりにも短絡的な語彙には、これ以降ご退場願うこととする。故、ここから先にホントウはない。

では、いかに滅するか。それは外的な肯定と内的な否定とによって行われる。滅私はず、内外に充滿した一切の現象群を、肯定というまなざしを以て客体とする。この段階においては、なにひとつとして貶めら

れてはならない。例え、流線型の自動車や合皮のジャケットであつても、平等に肯定される。日和見か、否。博愛や友好には回収されない、自己愛の大風呂敷を裏返しに広げるのだ。この時、世界には、一つの人型をした真空が生じている。

次に、滅私の一つの内燃機関として始動する。内的な否定とは、あらゆる客体の通過によって生じた感情のうち、可燃性のものだけを内に封じ込める抑圧的態度に始まる。ひとたびニューロンの閃けば、とめどない連鎖爆発が無尽蔵に破壊の力を以て、秩序の糸を解きほぐすために、ハイ・トルクの回転を生じる。詩的世界を起動するための破壊は、内臓においてのみ行われるのだ。こうして、たちまちに血液を沸騰させる爆発運動は、孤独に始動せねばならない。

そうして生じた内的な爆発は、膨大な煤塵^{バイじん}を生じるはずであるが、しかし、その点は、未来の科学者が解決するだろう。触媒作用は破滅的演出を見事に丸め込み、新鮮なロマンをまき散らすのだ。滅私が、それを望んでいる。滅私とは、未来の技法であるといふ。

それはそれとして。

このごろ、食が細くなった。一日はようやく、早巻に移ろいだしたようだが、内臓には、夏がこびりついている。食べられないのは、かない。嵌め殺しの窓辺で、秋を待っている。腹が減った。

カノープス

弾ければ泡と呼んで

散れば花と呼び

忘れては思い出と呼んで

潰えては明日と呼ぶように

腐り切ってから瘧と呼んだ

一歩前に踏み潰した名も知らぬ虫に心で手を合わせ

一駅前に置きわすれた生菓子を違う店で買い直し

一年前に吐いた言葉をせつせと上塗りしているうちに

すっかり何もかもが

恐ろしいまでの平凡に飲み下されて

千々の刹那を縋々として堆く積み上げたハイ・タワーに

地平線上の秘匿星まで見透かす

タオル地のブランケットと

蜂蜜の入ったエスプレッソと

ハイライトの充分な

二人がけソファ―付きの展望室を夢見るうちに

アノ子をナニとも呼べなくなった

名残る

ホットワインと一冊の文庫本

それから小洒落た丸いミニト缶

自意識の集積をワン・ルームと呼べば

それら、根なしの占領地

アケられるのを待つ

いじらしさ

咽頭膜^{ノドボトケ}仏が唱える

願わくば

庶幾^{コヒネカ}わくば

アノ子に……

何を？

H A H A ! 　こんなものは、詩ではない。

すっかり、弱くなった。ヤダネ。

プロキシマ・ケンタウリ

特級の白熱球に

網膜を焼いて

一匙の矮星光を

知らない

から

ためらわず

捨てられたバス・ボム

逃がっている。筋を捨て、道理を捨てて、音律まで捨てたつもりで、其の
実、見失っているということをも、知らぬふりで。まったく、ウヌボレ
だ。救いようのない、ウヌボレだ。壊しちまった、バカだから。そう言
って、逃がっている。

卑小さを知ったわけじゃない。反省なんて柄でもない。ただ、恐ろし
いのだ、いつの日にか終わりの来ることが。もう遅かったと、繰り返し返す
ことが。それなら、初めからナニモ無ければいい。嘘だ。

文学と、軽々しく書く奴が嫌いだ。詩や散文と、恥づかし気もなく呼
ぶ奴が嫌いだ。コトバを好きと言う奴が、大嫌いだ。奴らは、大した貴
族様だ。円卓にぶちまけられたスクランブル・エッグを諸手に握り、げ
へら／＼と醜く食って、アア、確かにゲイジユツだ。

だが、そう書きながらも、己にはもう、これしか残されていないとさ
え、思っていたい。たった一つ差し伸べられた、冷たい梯子だと思っ
ていた。必死のつもりで、決死のつもりで、イノチガケだと、思ってい
たい。臆病と、脳髓と、浸潤と、弱いから。弱いから――
眩しくて、吐き気がする。

全ての光に捨てられた

そう思っていたいだけなのだ

hidden hidden

盲目のプラネタリアン

トタンの天井に

あまねく星を見る

疑似重力下の窓辺で、べら／＼と酔っている奴は、死ぬ。
だが、ヨイサ。少し眠る。

サザン・クロス

いつものことで

切り株には首が置かれて

キコリ
樵ベコ・ロスが

真鍮の斧を構える

シナコノ
四九つめの首もやはり

ペコ・ロスと同じ顔

ふと、アノ子が現れて、確かに羽衣が見えたのだ

感謝し申し上げているのでございます

ヒツグ・アザ
南天のお釈迦様！

見ていておくれ

真二つにしてあげよう

ベンチに座っておいで

ハンカチを敷くからね

斧がふられる

断

いつものことで

コンナモノカと去ってゆく

一つ目の首だけ好いている

ペコ・ロスの顔した幻影を

切ってしまった臍の緒を

懐かしむのはやめておくれ

嘔吐も嗚咽もかなわな延々のまどろみに

明日もまた、ナニヒツツ変わらぬ首を切らねばというのに

おすまし顔で

ペコ・ロスは眠っている

夢だ

夢だから

目覚めぬことを

目覚めぬことを

秘匿十字に祈って

断

笑止！

赤子め

オマエ

泣かねばヨイと思うたか

幻想に

レディ・メイドの感情を満載した

大泥舟を浮かべて

船底から採掘した泥団子を

どこへ持ち帰るというのか

洋上の機雷は欠伸もせず

完璧なイジラシサをもって

オマエの漂着を待っているというのに

赤く腫れ上がった腕に

水母のいたことを懐かしむ

大詩人

さあ！

ミルクもあんだよ・おしまいだ

感傷機関の発電所と

懐古の養殖場は

ポスト・オマエ臨時政府によつて

解体されるのだから

醜くだらりと

口を開け

新たな航路を拓き

爆発するニューロンは

オマエを滅却し

言語消失点へ葛進する

過熱したディーゼル機関だ

何を恐れるか

今こそ

眼球へ脳髄へ潜航し

炸裂する——虚妄爆雷！

盲

街角に首が一つ置かれた
眼球のない

首――

詩が添えられている

破滅的熱光源たる太陽は
乾坤を一重に焼き切らんとばかり
頭上一億五千万キロメートルの宙に
屹立したというのに（昼が来たのだ）
消えゆくはずの星々は全天にひしめき
空間失調を引き起こす徹底的な夜と寸分も違わず
燦然としている

光！

全ての光がそこにある
超新星から銀歯まで
混じらず吞まれず

幾億の鳥賊漁船が

世界を曳航していると

知ってしまった

その横で、烏骨鶏が物語る

詩人は、^{クログロ}黎々の両眼窩に、胡桃鉦の胎児を押し込み、響き得ぬ声で
銘々が喘ぐままにしておいた（輪唱の出来るように）。そうしている間
だけ、詩人には、全ての光が見えたのだ。

^{チフサ}乳房を求めて膨張を繰り返す胎児らの喉頭膜は、やがて、そのあまり
の丸みに子を宿す。胎児の子らは、瞬く間に胎児の口から生まれ出て、
鏡写しのキョウダイに恋をする。見えぬ、聞こえぬ、語り得ぬ、恋。そ
うして、二人ともが身籠った。胡桃鉦の胎児とは、腹に胎児を抱えた胎
児の事だ。永遠の胎児は全てを知らながら、唇を持たなかった。乳を飲
めない胎児は、すぐに死んでしまうものだから、詩人はその肉体に輪廻
を宿し、詩的生命の陶酔を、^{サシヤ}恣にした。旧刑法では罪だそうだ。

かつて、銀河南方の享樂民族が性欲と呼んだこの延々は、ほんの戯れ
に作られた。瞬く間に絶滅した彼らの遊戲は、盜掘家らによって祀り上
げられ、今では、滅私と呼ばれている。

アド・リブー 予定的帝王切開

ウオルター・V・スコットという名前

恥かむ、葡萄酸いの

無香料であるということ

肯定的にサンダルを履くことの出来た十五夜

ミヴ・サフラーニ

ヴォ・ボ・ヴォイスに一杯の夜光貝が注がれて

とっくり陶として、満ち／＼た VITAMIN

満腹のヴ・ヴ・白絹

とろん眼アヤメに

北枕仙人を名乗る東海道の夢

色を知つて

一分間のハンド・メイド電化

ボルネオイズムの後継者は。

月桂樹を二日歩かせる

ずつくずつく

ニトログリセリウム、過発酵

湖は小便小僧が、鉋一つで掘り当てた

七度のノックで甘皮が剥ける

ここは地続きか

親不孝な四三〇ミリのペットボトル

岩肌に地下茎を成すヴァーティカル・ツイン・エンジンが

今となつては不健康というわけであります

手繰るのは毛糸よりもファウストがよい

ブラトンのうなじに汗

それをブラトニック

吸殻と灰皿

茶漬けにして飲み干せ

あばたもあばた

クック

ドゥードゥードゥー・ドゥ・ドゥ・ドゥードゥードゥー

作為と三度舌に書いて……。

熟ワレしなぶ、メロン

祖母母の襖

きや、きや

ハナコガネも洗濯は週に一度

平積みの本に乗せたばんぼり

目を瞑るまゑに跳ねていた

一行余り（予定されていた）

きと・きと——生活課月報

フルーツを切る上で気を付けねばならないことがある
一つは、切る前後、どちらがフルーツらしいかなど考えぬこと
一つは、その甘味と酸味を決して疑わぬこと
一つは、切れ端のつまみ食いを忘れぬこと
カッパドキアは、それで減んだ

牛乳を注ぐ上ではさして慎重になることはない
花瓶の七割を超えないように（おおよそでよい）
二〇センチ以上の高さから注ぐ（これは必ず）
生ける花は、白を避けた方がよいが
百合はこの限りではない

七寸以下の花火玉の製法は次の通りである
N極の二つ以上ある磁石を以て
西海岸の砂浜とコンクリートの隙間から
およそ一〇〇グラムの鉄を集める
なるべく細かなふるいにかけて後
ステンレスのボウルに入れ、軒下で寝かせておく
大氣中に生息する、火薬酵母の機嫌がよければ
九日の内に、一尺ほどに育っている
運慶の気分がしたら、荒い表面を削ってやる

ガリ／＼からチ／＼に変われば上等
あとはお好きなように（浅漬けが美味）

水耕栽培は秋口に始めるのがよい
青魚は足が早いので
根菜の部類が初心に向く
水道局の定休日でない限り
失敗することはごくまれである
南方のご婦人なら心配は無用
蓮根だけはやめておくこと
花が咲いては
生真面目に暮らすことになる

晩夏の化粧は南向きで行うこと
北を向いては粉が浮く
襖があれば開き
亭主の安楽椅子には引つ越し願うこと
窓は閉じている方がよいが
雨の日には半分ほど開くこと
ぼつねんとした気分が
残暑、うんと美人によい

秋の知らせは、気長にお待ちいただきたい。

ダル・バロス―ガルガンチュアの甘味

水道水が冷えていなくて、ざら／＼としているのがさみしい
長く飲み続けていると咽喉膜が焼け、爛れている

酒も飲まず、叫びもあげず、静かに生きる

ヒト並のよい子だと思っっているのに

一羽のセキセイインコを

打ち潰したような

蛍光色の憂鬱が

あらわれると

げろを吐く

ふつりと
ほどけること

おさなころと蟻螂の恋

ウラン硝子に隠された

パステイスの甘味

或処女のベリット

プレートテクトニクスに浸して花開かせた

立ち昇れば病原菌

静脈瘤の転がし方

カンブリアの血抜き法

孤独な老アノマロカリス

孕んだことに

あくせく

二つ目のマウス・ウオッシュを買った

エタノールとメンソールがあまりにさわやかで

夜明かしの前に吞み下した甘味が、肉体の興味を失わせた

遠い未来、太陽が紛れもなく赤だったころ。幾度目かのまどろみに沈みかねた幻想皇帝は、女官を呼びつけた。女官は、股を開けば、アフリカをも容易く踏み越える、パンツスタイルの巨人である。無限の住居を一蹴りに越え、無限の宮殿を一薙ぎで灰燼に帰し、瞬く間に皇帝の前に現れた。皇帝は埃をかぶりながら、恥づかしげに、寝物語を頼み込んだが、足の付爪にも満たない丈に、女官は声を聞いていない。退屈そうにもそ／＼と星を喰っている。皇帝は、千人の鍛冶屋に青銅の梯子を作らせ、三月の後に空へと昇った。腐臭を放つ女官の口元で皇帝は叫び願ひあげる。皇帝の髪は白髪交じりになっていた。

皇帝の言葉を聞いた女官は、生真面目にその巨軀を横たえた。皇帝は喜び、一月と経たぬうちに梯子を駆け下りたが、眼前には、西向きに横たわった足があるばかりであつた。皇帝は二千人の兵を連れて、馬を駆り、驚くべき速さで、大陸を駆け抜けた。道中、三千の渡り鳥と、その他あらゆる動物が加わり、万を超える地響きとなった。

女官の胸元に差し掛かったころ、ようやく声が聞こえた。それはあまりにも柔らかく、あまりに稚拙で危うかつた。膨張する自意識の膜と、それを貫く黒曜石の鏃のような鋭い陶酔は、皇帝にだけ感じられ、皇帝を残して、みな足を止めて退屈な眠りについてた。

皇帝は一人、馬もなく、水もなく、ぼろきれのようになりながら千夜を越えて、とう／＼女官の口元にたどり着いた。とうに語り終え、軀をかく女官の垂らした唾液に、皇帝は性欲と甘味を知ったという。

エントモファガ・グリリの七つの宣言

一、牧歌だ

おおらかな平靜がある。全方位への捕食的受容の照射は、最も不確かな、エキリチュールという名の泉を、蜃気楼として倒立させた。十全にイイカゲン製の塗膜を張られた今、その枯渇まで幻惑の霧の内に包み隠されている。牧歌的精神は生涯の健康によい。

一、百合はしら／＼と咲いている

元より、白色の標準器であったかのように。奴らは素裸で、内臓をさらけ出すことを誇るかのように、すましている。これは、引き抜いてしまわねばならない。隠し持った根の露になった時、恥じらいが、黄色のあばたとなって浮かび上がるのだ。そうでなくては、味気ない。あまりにも素朴に、煮込んでしまうのがよい。

一、破壊は恥じらいだ

これまで外部へ投擲されてきた否定／破壊は、モドカシサと恐れとから来る、逃避の手法であった。以後この投棄を不法とする。否定は恥部

である。が、故に破壊するのではない。破壊の如き爆性は恥部であるが故に生じ、恥じらいが新動力の自閉鉋山となり得るのだ。恥じねばならない。放出口を失い、抑圧された恥じらいは、忽ちのうちに臨界点を迎え、胎内の秩序とともに爆縮する。過去、現在、未来を一身に仮託し破碎するデイーゼル。これを、見事に運転しなくてはならない。

一、未完成だ

滅私は遂げられない。絶望もまた効力を持たない。滅私は生まれながらに永遠の未完成だ。驕進するうちに、自らも置き去りとする運命である。一切のクリシェを拒みながら、それに吞まれてゆくように。やがて、いくつかの幻想を残して放棄されるであろう。予定された心停止を、嵌め殺しの窓に飾り、ニヒルを笑いながら進む。

一、だが、血は沸騰している

楽しみで仕方がないのだ。滅私は未来を発見した。それはまったく、カンブリアと同じ景色だという。新生の竜どもが笑っている。奴らは赤を知らぬから。すべてが、煙熱の後に過去となる。新しさもまた、過去の観念だ。興奮だけが、喜びになるとよい。

一、ここに宣言する

滅私主義とでもいうべき、暫定的文学態度を一つ愛してみること。

滅私主義は、完膚なきまでに轟沈せしめること。

遊戲的態度を拒み、遊戲的であること。

響きに偏執し、無頓着であること。

停滞することなく、図々しく腰を据えていること。

皆既日食の一日を除いて、絶えず傷つき続けること。

悲しみとアコガレに、恋せぬこと。

確かによじ登り、進んでいると、感じている。全ての光を天にのみとめ、全ての肯定と否定を叫びながら、虚妄の終着点を目指している。

やがて、滅私は極大の暴力性を以て、自らを喰い尽くし眠りにつく。

思想も博識もついに抱くことの無いまま、形骸となるその日にこそ、盛大に乾杯のできることだろう。優美な屍骸に、なりたいたいと願う。

一、そしてこれは、未来のために。

断

あとがき

しらす

今回は現役部員として寄稿できる最後の機会だ！ 書くぞ！ と意気込んだはずが、提出できたのは延長後の締め切り三十分後でした。いつものことではありますが、編責さん、申し訳ありませんでした。部を追い出される前に、もう少し成長したいです。

本編読了前にとがきを読むという派閥の方には軽くネタばれですが、今回の作品はいわゆる死ネタです。それでも、鬱々としたものにはしたくない（苦手だから）……との作者の願望が働いた結果、何やらモノローグがはっちゃけてしまいました。これほど！ だの？ だのを書いたのは、大学入学以来初めてです。どうかそれが奏功しているよう、祈っております。

呉田仁

嘘号。だから嘘を吐くのだ。

谷山大哉

人物の内面をどうしても上手く書けなかった。

まだまだ力不足。

締め切りを守れなくてすみませんでした。

黒田ももん

こんにちは。布団から脱出できない大学生もどきです。やるべきことが迫っているときに誘われた布団の中とは、こうも心地よいものですね。スリリングで大変素晴らしいです。

今回は、架空文学賞企画に参加しました。ちょうどこの文章を書いている二〇二五年の夏は、久々に芥川賞・直木賞ともに受賞作なしで話題となりましたが、文学賞の選考委員となった錚々たる文豪たち（特に昭和期！）が、受賞作だろうと正直に評価していくのが好きです。さすがは文豪、着眼点の鋭さと選評の美文が素晴らしいです。

せっかくの企画ということで、今回レイアウトでかなり遊びましたが（編責さん、お手数おかけいたします）、実はレイアウトよりも選評を書くのに骨を折りました。結果、それっぽいけれども中身のないことを言っている謎の選評ばかりになりました。比べられる次元にすら立てており

ませんが、やはり文豪たちは異次元ですね。架空の選考委員と作家の名前があまりにもテキストなのは、ご愛嬌です。思いつきませんでした。

荷輪治吾郎

編責さん、提出を待っていただきありがとうございました。短い話の方は過去に書いていた記録にちよこつと手を加えたものです。ちよつと長い話の方は一回生の頃を思い返しながら書きました。なんか似たようなことばかり書いているなあという気持ちです。

はにほ

エッセイ企画で嘘を書くという悪の所業をするのは、今春に続いて二度目です。本当にすみません。丹波篠山の黒枝豆（とてもおいしい）を差し出すので、許してください。

実は、これを書いている数日前から丁度気温が下がり始めました。急に寒くなったので心の準備をする間もなく、着られる服が消滅しました。もうコートを着ている人がいてびっくりです。秋の到来にテンションが上がって話を書き始めてから、このあとがきを書くまでの期間を秋とカ

ウントすると、その期間約一ヶ月。出番が少ないからか、なんかかつこよく見えますね！
今まで簡潔あとがき派だったのですが、最近はいちあとがきを書く人の方が希少になってしまったので試しに方向転換してみました。一ページくらいスペースに余裕があるそうなのでこのまま一ページ分書き続けたって良いのですが、今回はこの辺で勘弁しようと思います。大変だったので次からは元の長さに戻っていることでしょう。

なこ

イカ墨パスタズルズル事件

親嘴鳴

一年、齢を重ねて不自由になりました。馬鹿でありたいです。

後藤鐵式

回答なし

編集後記

編集後記

嘘、という単語からイメージされる印象として、まずプラスのものを挙げる人というのはあまりいないのではないかと思います。

「嘘はバレなきや嘘じゃない」という言説もありますが、実際にはつじつまが合っていないものを合っているかのように見せる、というのはほとんどの場合大変難しいことです。バレた時に大ダメージを被るリスクは取らない方が良好、という理由で「嘘は悪いもの」という認識があるのですが、生きている中で嘘を見かけることがある以上、嘘は社会にとって必要悪だということなのでしょう。

このように大方はつかない方が良好ものとして、また、真実と比べた時に劣るものとして扱われることが多い「嘘」ですが、この「嘘」号に関しては、人を傷つけるための嘘というのが少なかったように感じます。募集をかけた時はどんな尖った作品が集まるんだろうとドキドキしたのですが、意外な結果ではなかったのかもしれない。なんせ、どうぶん部員は優しい人達ばかりですから……

改めまして皆様、すぎかえる六甲祭号「嘘」をお手に取って下さり誠にありがとうございます。同時に、製作に関わって下さった皆様のご協力にも感謝申し上げます。作品を寄せてくれた部員の皆さんによって、小説からエッセイ、短歌、詩集、絵本、選評（！）まで幅広い作品が集まり、読みごたえのある一冊となりました。

ぜひお気に入りなども探しつつ、本誌を楽しんで頂ければ幸いです。

編責

どうぶん文庫最新刊

すぎかえる

太陽・沈黙

動と静が体现されたテーマ作品に加え、復刻
企画・プロット交換小説なども収録！ 珠玉
の小説達がいよいよ短編集。嘘号と同時刊行。

新入生号

新入生号2025

今年度の新入生初参加の一冊。新しい風をも
たらす瑞々しい作品を堪能せよ！ 風物詩、
新入生に紛れて参加する先輩の作品も収録。

すぎかえる

硝子

舞台指定小説集「ガラスの町」をはじめとし、
旅日記、結末指定小説など企画も満載。プリ
ズムの輝きを放つ、読みごたえ抜群の一冊。

どうぶん文庫最新刊

すぎかえる

夜

明

け

人々が夜明けに見出すのは変化か無常か、はたまた希望か。五編の短編小説が薄明の美しさを色鮮やかに描き出す、奥行きのある一冊。

すぎかえる

月

耽美、憧れ、ロマン。月影に手を伸ばす試み、テーマ作品に加えて、童話改変小説など企画作品も充実。ページを捲る手が止まらない！

すぎかえる

路地裏・しらない

心のさざめきを忍ばせる「路地裏」、しっとりとした余韻を残す「しらない」。一枚の写真から物語を紡ぎだす、写真創作文企画も収録。

児童文学研究会は、六甲台第一キャンパス・グラウンド横にある部室で活動を行っております。

興味を持たれた方は、ぜひお気軽に部室を訪ねてください。

ご意見・ご感想は下記アドレスまでどうぞ。

doubun12345@gmail.com

過去作が読めるホームページはこちら。

<https://doubun1234.wixsite.com/doubun>



X(旧 Twitter)では活動状況の報告を行っております。

https://twitter.com/KU_dbn



すぎかえる 263 号「嘘」

2025 年 10 月 23 日 初版発行

執筆者：

編集責任者：

発行責任者：

発行元：神戸大学児童文学研究会
